

JAPRS

JAN.2020 No.1
新春号

目 次

会長年頭挨拶	1
2019年JAPRS企業説明会レポート	2
Avid Pro Toolsセミナーレポート	4
2019年 JAPRSレコーディングセミナー（スタジオワーク編） レポート	5
令和元年度通常総会、懇親会および30周年記念表彰レポート	7
第18回JAPRS認定「サウンドレコーディング技術認定試験」実施報告	10
第3回デジタル伝送技術勉強会「最新デジタル伝送の現状と今後」実施報告	11
ラウドネス勉強会「音創りとラウドネスレベル調整との関係」実施報告	13
CD高音質技術勉強会「UHQCD／MQA-CD」実施報告	15
賛助会員交流会	17
第16回JAPRS認定「Pro Tools技術認定試験」実施報告	18
「アンビソニックス・3Dオーディオ勉強会」実施報告	19
第31回JAPRSゴルフコンペ	31
中国交流プロジェクト北京視察ツアーレポート	32
Inter BEE 2019賛助会員社ブースツアーレポート	36
第26回日本プロ音楽録音賞授賞式レポート	38
第26回日本プロ音楽録音賞審査委員講評	51
「音の日のつどいパーティー」レポート	63
会員動向	65

会長年頭挨拶

(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長 高田 英男



明けましておめでとうございます。

日本音楽スタジオ協会を代表し、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

当協会は1990年に社団法人化して以来、本年度で設立31年目を迎えることとなりました。昨年は30周年の節目に、今まで協会を支えて頂きましたご先輩方に感謝の意をお伝えし、当協会の新たな発展に向け思いを共有いたしました。

さて、デジタル技術の進化は更に進み、5G時代・AIプラグインによる音創りなど制作環境も大きく変化する今、「最新の技術探究」を進めると共に、人による音楽制作を基盤とした「専門学校連携による若い人材の業界への勧誘」・「働き方改革による新たな対応」などを進めて参る所存です。

また、昨年度はレコーディング三者協議会（通称 Recording Forum; 略称 ref）「一般社団法人日本音楽スタジオ協会」、「東京音楽事業者連盟」、「一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN」の3団体にて北京訪問し、音楽ビジネス～録音技術交流について意見交換を行い、日本での音楽制作を提案して参りました。北京で訪問した各企業のビジネスに対するスピード感・若さ・熱意を体感し、新たに技術交流に向けたネットワーク構築も進めて参ります。

本年も皆様のご支援、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

2019 年 JAPRS 企業説明会レポート

2019 年 5 月 18 日（土）、レコーディングスタジオへの就職を目指して専門学校に在籍する学生を対象とした合同企業説明会が専門学校 ESP エンタテインメント東京で開催



12 号館 B2F Club 1ne 2wo

れました。この催しも今回で 19 回目となり、JAPRS の公式行事として定着しています。参加学生は、新潟、郡山、名古屋、大阪からの学生を含めて 152 名が参加。また、出展側からは、正会員スタジオ 7 社と賛助会員 1 社、関連会社 1 社から 16 名の参加により実施された。

定刻 13 時より同校の 12 号館 B2F Club 1ne 2wo にて参加者全員が集い、高田会長の挨拶に続いて、参加

企業各社が自社の概要を紹介、そして峯岸 太一専門学校委員より説明会の進行について説明された。

その後、説明会会場を各教室に移し、二部がスタート。1 回あたりの説明時間を 25 分とし、前半の 3 回は協会で指定した出展ブースで参加企業からの説明を受け、10 分の休憩後、後半の 3 回は各自が希望する企業ブースでの説明を受ける方法で実施した。

過去最多の参加学生たちが説明に耳を傾け、メモを取り、質問をしながら説明会は進行して行きました。

予定時刻の 17 時に 6 回目の説明が無事に終わり、企業説明会が終了。

報告の最後に、ご出展いただいた企業の皆様に心より感謝申し上げます。



高田会長



峯岸専門学校委員



(株) エムアイティギャザリング



(株) サウンド・シティ



(株) サウンドインスタジオ



(株) 音響ハウス





(株) JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント



(株) バーディハウス



(株) ミキサーズラボ



(株) メディア・インテグレーション



ヒビノ (株)

出展企業は以下のとおり・・・

(株) エムアイティギャザリング	代表取締役	横山 武
(株) 音響ハウス	レコーディングエンジニア	金子 創姿
	技術部 統括副部長	太田 友基
	技術部 音楽グループ長	櫻井 繁郎
(株) サウンドインスタジオ	管理部門 管理統括部長	頼富 清一
(株) サウンド・シティ	技術グループ 課長	河野 洋一
	営業部 部長代理	吉川 浩司
	オーディオ技術部 部長	中澤 智
(株) JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント		
	営業グループゼネラルマネージャー	石野 憲一
	エンジニアグループゼネラルマネージャー	山田 幹朗
(株) バーディハウス	レコーディングエンジニア	森 和孝
	レコーディングエンジニア	安中 龍磨
(株) ミキサーズラボ	取締役	中村 隆一
	営業部	櫻井 巧也
(株) メディア・インテグレーション	取締役	岡田 詞朗
ヒビノ (株)	ヒビノサウンド Div.	井川 郁香

Avid Pro Tools セミナーレポート

2019年5月29日（水）に（株）メディア・インテグレーション ROCK ON PRO セミナールームにおいて、下記概要により NAB Show 2019 に先行して開催された AVID CONNECT 2019 からの情報を中心とした「Avid Pro Tools セミナー」を開催しました。

【セミナー内容】

講師：前田 洋介氏／（株）メディア・インテグレーション

1. NAB 2019 に先立ち開催された AVID CONNECT 2019
2. ACA Vote Result 2019
ACA（Avid Customer Assosiation）が中心となりユーザーからの Avid 製品に対して寄せられた要望等の集計結果の発表内容について。
3. Pro Tools What's New
Pro Tools 2019 の新しい機能について。
4. Pro Tools による Dolby Atmos ミックスについて
チャンネルベース（ベッド）とオブジェクトベースのバスの取扱い等について。



前田 洋介氏



セミナー風景

2019 年 JAPRS レコーディングセミナー(スタジオワーク編)レポート

2000 年に第 1 回目を開催して以来、昨年で 19 年目を迎えた新プロ・エンジニア養成セミナーですが、今年より名称を変更しての開催となりました。

専門学校委員会の主催により実施されているこのセミナーは、JAPRS 賛助会員加盟専門学校 20 校の 2 年生以上を対象として、東京地区、大阪地区正会員スタジオの協力により継続されているもので、プロのレコーディングスタジオにおけるアシスタントの役割について伝える内容となっています。

また、一昨年から名古屋地区でも開催することとなり、名古屋ビジュアルアーツを会場とし、会員以外の専門学校および音大等からの参加も募って実施しています。

今回は、6 月 8 日(土)、15 日(土)、29 日(土)で東京地区 1 日 2 回、大阪地区 1 日 3 回、名古屋地区 1 日 2 回開催。

東京・大阪地区実施内容

- ①セミナーで使用するレコーディングスタジオの説明
- ②音源データの取り込みについて
- ③ボーカルダビング作業を想定して、セッティングに対する心構え、歌詞カードの準備、カウンターの付け方～ボーカルエディット作業の実演および体験
- ④レコーディングエンジニアになるための音創りの基本、音創りに求められる感性、音源の試聴
- ⑤ミキシング作業の実践および解説
- ⑥スタジオワークを行うために(総括)

名古屋地区実施内容

- ①セミナー進行に関する説明
 - ・マイクセッティング
 - ・音源データの取り込み
 - ・マイク回線チェック
 - ・エンジニアの音創りへのサポート
 - ・ドラム&アコースティックギターのダビング
 - ・ラフミックス
- ②一連の作業の流れの中で、エンジニアおよびアシスタントエンジニアからのアドバイス(セッティングやその他準備に対する考え方、心構え)
- ③スタジオワークを行うために(総括)

東京地区会場(6 月 8 日(土) 於: サウンドインスタジオ Bst)

参加者: 6 校 21 名

エンジニア: 高田 英男 氏

アシスタントエンジニア: 稲垣 杏理 氏

サポート: 小幡 準二 氏

大阪地区会場（6月15日（土）於：スタジオグルーヴ Ast）

参加者：3校 37名

エンジニア：高田 英男 氏

アシスタントエンジニア：金子 拓人 氏

サポート：及川 拓馬 氏

名古屋地区会場（6月29日（土）於：名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio）

参加者：2校 26名

エンジニア：中山 佳敬 氏

アシスタントエンジニア：伊藤 鈴夏 氏

タイムスケジュール

東京会場：サウンドインスタジオ Bst

6月8日（土）

1回目 10:30～12:45

2回目 13:30～15:45



大阪会場：スタジオグルーヴ Ast

6月15日（土）

1回目 10:00～12:15

2回目 13:00～15:15

3回目 15:30～17:45

名古屋会場：名古屋ビジュアルアーツ Pixy Studio

6月29日（土）

1回目 13:30～15:45

2回目 16:00～18:15



令和元年度通常総会、懇親会および 30 周年記念表彰レポート

<通常総会>

6月6日（木）、JAPRSは港区元赤坂の明治記念館1F「千歳の間」において、令和元年度通常総会を開催し、平成30年度の事業報告書（案）、収支決算報告書（案）、令和元年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）に関し正会員に諮り、全ての議案が異議なく全員一致で承認された。

はじめに、佐藤専務理事が定足数の確認を行い、書面表決者を含む33名の出席数を確認（定足数）、総会の開会を宣言した。

続いて高田会長が議長に当たり、議事録署名人として副会長の三浦瑞生氏、監事の清水 三義氏の両名が選出された。

次に内藤事務局次長より第1号議案「平成30年度事業報告書（案）」及び佐藤専務理事より「収支決算報告書（案）」について説明が行われ、審議の結果、異議なく全員一致で承認された。

続いて内藤事務局次長より第2号議案「令和元年度事業計画書（案）」及び佐藤専務理事より「収支予算書（案）」について説明が行われ、審議の結果、第1号議案と同様に全員一致で承認された。

最後に議長である高田会長が閉会を宣し解散した。



高田会長



通常総会

<懇親会>

通常総会終了後、18:30より明治記念館1F「若竹の間」において、正会員、準会員、賛助会員及び招待者を含む88名が集い、懇親会が開催された。

司会進行は、総務委員会の中村 隆一氏（（株）ミキサーズラボ）が担当し、高田会長の挨拶に続き、経済産業省 商務情報政策局 コンテンツ産業課 課長補佐 中山 祥氏により来賓代表として挨拶が述べられた。



経済産業省 中山 祥氏

そして、乾杯の前に JAPRS 社団法人化 30 周年記念表彰に移り、本年社団法人化 30 周年という JAPRS の記念すべき年を迎えるにあたり、特に協会に対して多大な貢献を果たされた 3 名の方々に功労賞を授与、また、協会設立当初より賛助会員として入会され、これまで協会を支えていただいた賛助会員 6 法人および学校法人専門学校 6 校の方々に対して、感謝状を授与させていただきました。

<功労賞>

(株) ミキサーズラボ 会長 内沼 映二様
 元・(株) サウンドインスタジオ 常務取締役 石野 和男様
 元・一般社団法人 日本オーディオ協会 会長 校條 亮治様

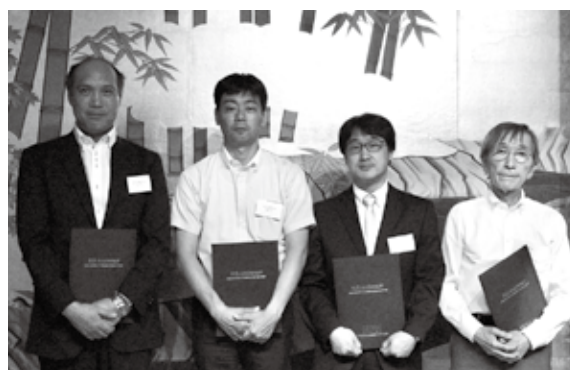


石野 和男様 校條 亮治様 内沼 映二様

<感謝状 賛助会員 6 法人> ※ 写真左から
 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)様
 (株) エス・イー・エス様
 日本音響エンジニアリング(株)様
 (株) 若林音響様
 (株) ソナ様
 オタリテック(株)様



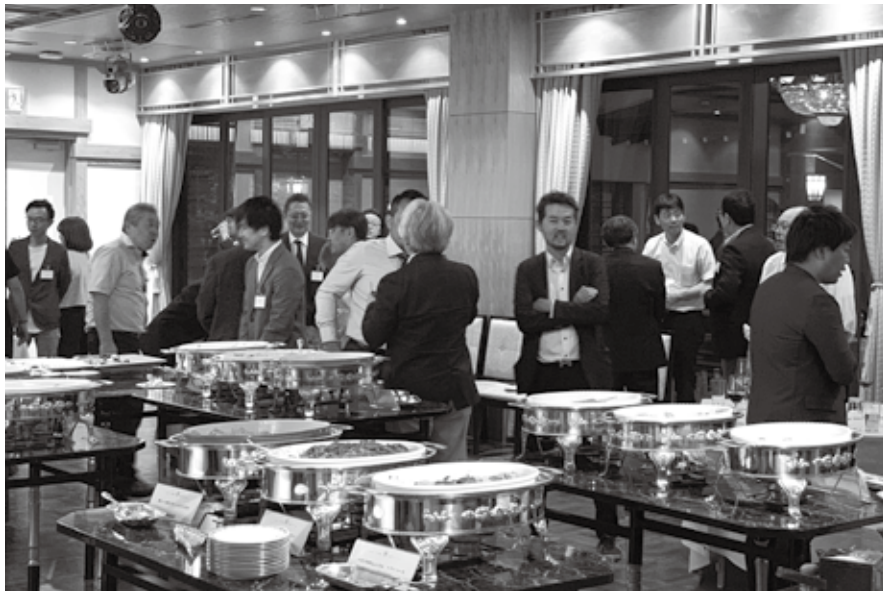
<感謝状 専門学校 6 校> ※ 写真左から
 東放学園音響専門学校様
 日本工学院専門学校様
 キャットミュージックカレッジ専門学校様
 音響芸術専門学校様
 大阪スクールオブミュージック専門学校様
 (ご都合によりご欠席)
 専門学校ミューズモード音楽院様
 (ご都合によりご欠席)



30周年記念表彰に続いて乾杯となり、佐藤 賢一事務局長により乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。

更に歓談が続くうちに中締めの日間となり、総務委員会・清水委員長による挨拶が行われ、本年の懇親会も無事に終了となりました。

スタッフとして開宴前より準備にご協力いただいた会員の皆様、有難うございました。



懇親会



佐藤事務局長



清水総務委員長

第 18 回 JAPRS 認定「サウンドレコーディング技術認定試験」 実施報告

7月7日(日)、札幌×2、仙台×2、郡山、新潟、東京×8、名古屋×3、大阪×3、広島、福岡の9地区22ヶ所の団体受験会場に分散して実施された「第18回サウンドレコーディング技術認定試験」については、当初の受験申請者数589名に対し、欠席者69名を除く当日の受験者数520名の参加により実施されました。



国際アート&デザイン大学校



国際音楽・ダンス・エンタテインメント専門学校

試験内容は例年通り四者択一マークシート方式で、音響の理論／電気音響とスタジオシステム／レコーディング技術と先進技術／音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史などの4ジャンルから各25問(計100問、1000点満点)が出題されましたが、平均点は709.2点という結果になりました。

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

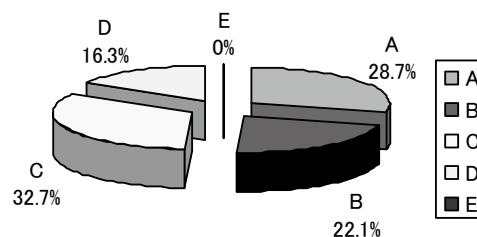
- (1) 受験申請者 589 名 欠席 69 名 受験者 520 名
最低点 210 点 最高点 1000 点 (37 名) 平均点 709.2 点
- (2) 平均点詳細 (各ブロック 250 点満点)
 - I. 音響の理論
正答率 73.2% 平均点 183 点
 - II. 電気音響とスタジオシステム
正答率 66.8% 平均点 167 点
 - III. レコーディング技術と先進技術
正答率 65.8% 平均点 164 点
 - IV. 音楽・音楽著作権・音楽録音の流れ・録音の歴史など
正答率 77.9% 平均点 195 点

(3) 得点別人数

1000～900	154 名
890～800	59 名
790～700	57 名
690～600	72 名
590～500	64 名
490～400	76 名
390～300	33 名
290～200	5 名
0	0 名
計	520 名

(4) ランク別人数

A ランク	1000～901 点	150 名
B	900～701 点	115 名
C	700～451 点	170 名
D	450～201 点	85 名
E	200 点以下	0 名
計		520 名



第3回デジタル伝送技術勉強会 「最新デジタル伝送の現状と今後」実施報告

技術委員長 高田英男

<主旨>

デジタル伝送技術勉強会については昨年度2回に亘り各デジタル伝送の規格についてのセミナーを行い、多くの参加者が集まった。今年度は各デジタル規格の深堀をテーマとして検討したが、短時間での理解はかなり難しくなるとのアドバイスを賛助委員会（西原氏、岡田氏）から頂き、セミナーのテーマを「デジタル伝送の現状と今後」についてお話を頂くことにした。

スタジオビジネス強化を目指す中、デジタル伝送を活用した新たなスタジオビジネスへのヒント及び、各機材の集中管理による効率化など、スタジオ事業と連携したセミナーとした。

令和元年6月24日（月）15：30～18：00

場所：東放学園音響専門学校 清水橋校舎 2S1 教室

第一部 「デジタル伝送を使ったビジネスの現状と今後」

① NABショーにおける各社デジタル伝送動向及び今後について

講師：前田 洋介氏／（株）メディア・インテグレーション

② IP伝送の実例紹介

講師：柳 秀和氏／オタリテック（株）

第二部 「4K動画＋ハイレゾ・ストリーミング配信の紹介」

講師：遠藤 真氏／NTTエレクトロニクス（株）

映像コンポーネント事業本部ビジネス戦略室
（協力：ラディウス株式会社）

- ・ラディウス NeSTREAM 4K動画配信＋ハイレゾ・ストリーミング配信紹介＆デモ
- ・ライブストリーミング配信実施例の紹介



高田技術委員長

<セミナー報告>

メディア・インテグレーション（前田氏）から、デジタル伝送規格SDI信号について

・EthernetとSDI信号の速度比較・SDI信号の活用例（大規模インフラ、Network機器、Grand Master）・SMPTE ST-2110規格と導入メリット（AES67, RAVENNA対応）などについて説明を頂いた。最後にNAB2019レポートがあり、IP Showcaseは閑散としていたが、IP Pavilionは混雑しておりIP伝送によるビジネスが競争に入っているとの話は大変印象深かった。



前田 洋介氏

オタリテック（柳氏）から、LAWO社が取り組んでいる最先端デジタルPLAZAMEDIA放送センターのスポーツ中継に対する機材の集中管理～各機器の効率良い使用例など説明があった。

今後スタジオ機材の集中管理などを考える良い機会を頂いた。



柳 秀和氏

NTT エレクトロニクス（遠藤氏）から、「4K 動画＋ハイレゾ・ストリーミング配信の紹介」をテーマとし

- ・画像配信の基礎のお話・ライブビューイングの新たな活用・ハイレゾライブ映像配信システム
- ・ハイレゾ配信による音質が人間にとって、どの様に感じ何故良いか
- ・テレフンケン LIVE from the Lab が行っているスタジオを使った演奏の配信例の紹介
- ・最後にラディウス社協力にて録音スタジオを使い 4K 動画＋ハイレゾ・ストリーミング配信ソフトをクラウドからダウンロードし、デモ再生が行われた。



遠藤 真氏

遠藤氏からデジタル伝送を活用した新たなスタジオ活用について提案があり、事前の打ち合わせであるが、デジタル伝送技術を使った新たなビジネスは業界全体として取り組み、各イベントが点で終わる事では無く、線に繋いで行く努力が必要とのお話を頂いた。

<纏め>

デジタル伝送も IP 伝送、5G など新たな時代に入って行く今、スタジオビジネスについても従来の音楽録音制作を軸としながら、新たなスタジオビジネスにチャレンジする時代に入ったと感じている。特に録音制作においてプロの音楽スタジオは特別な音響空間&遮音、高音質機材・最高音質のモニタースピーカー環境など多くの優位性を兼ね備えており、今後ライブ会場とスタジオをデジタル回線で繋ぎ最高の環境でライブ録音収録や、4K 動画＋ハイレゾ録音による音楽制作など、録音スタジオの優位性を生かした新たな取り組みが必要である。

最後になりましたが講演頂きました皆様に、誌面を通して感謝申し上げます。



セミナー風景

ラウドネス勉強会「音創りとラウドネスレベル調整との関係」 実施報告

技術委員長 高田英男

<主旨>

CD制作の為に少しでも音量感を上げる工夫や、楽曲によっては派手な音創りを目指しマスター音源を作成している現状ですが、TV放送及びストリーミング配信等で再生される際には、ラウドネスレベルK特性-24(LKFS)により、音量感は大きく変化します。

この勉強会では、音創りをする際の ①周波数帯域 ②ダイナミックレンジなどが、どのようにラウドネスレベルに関係してくるか、ポストプロ・配信サイト・プロオーディオ機器販売代理店の各スペシャリストからそれぞれの業務対応についてお話をいただいた。



高田技術委員長

日時：令和元年7月2日(火) 16:30～18:30

場所：東放学園音響専門学校 渋谷校舎 2A4 教室

内容：◆「音創りとラウドネスレベル調整との関係」

- ①「ポストプロダクションエンジニアによるレベル調整に関する考え方の実際と留意点等」

講師：村越 宏之氏／(株)IMAGICA Lab エンターテインメント事業本部

映像制作部リンクスグループサウンドスーパーバイザー

オブザーバー：末次 亮介氏／(株)サウンド・シティ

ポストプロダクション事業部 MA 課 課長

- ②「ストリーミング配信における音量調整の現状」

講師：池上 卓也氏／(株)USEN コンテンツプロデュース統括部

編成部 サウンドデザイン課

- ③「レベル調整の考え方と実際(K特性による音量変化)」

講師：山口 哲氏／(株)メディア・インテグレーション

MI 事業部 General Manager

<セミナー報告>

「ポストプロダクションエンジニアによるレベル調整に関する考え方の実際と留意点等」

IMAGICA(村越氏)からはポストプロ～放送番組への納品についてはラウドネス運用(-24LKFS～-28LKFS)基準が厳格に管理されており、基準外のソフトは受け取れない(戻してしまう)との事。更にラウドネスK特性フィルターが通る為、2kHz～4kHzで約3dB上がっており、中域にピークがある音源については更に音量を下げられてしまうとの事。(低域については通り易い)、サラウンド音源についてサブウーハーチャンネルはカウントされず、Ls, Rsは1.5dBあげて計測される。セミナーではCDマスタリング用にコンプで音量感を創りDレンジの狭い音源と、ノーマルの音創り(Dレンジの広い音源)にナレーションをダビングした音源を使い、音量比較試聴を行った。元音源とラウドネス処理音源との音量差異は一目瞭然であり、Dレンジが狭い音源は極端に音量感が下がる事を理解出来た。更に村越さんからはミックス時の音量レベルについてお話があり、ポストプロ現場では79dBでモニター基準しているなど、現場ならではの貴重なアドバイスを頂いた。



村越 宏之氏

「ストリーミング配信における音量調整の現状」

USEN（池上氏）からはUSEN音楽放送の特徴として、有料であり番組数540以上・企業専用放送700社超え・加入者数62万人以上、更にお店で聴かれる事による特別な音量調整など教えて頂いた。具体的には音量ターゲットレベルを-20LKFsに設定しラウドネスの中心値を揃える事で、お店で流した時にお客様にとってBESTな音量を意識している。更にスマホで聴けるUSENサービスをスタート、既にスマホに入っているコンテンツの音量と音量差異が無い対応として、リファレンスレベルを-12LKFsに設定している。会場デモでは元音源をそのまま配信した音量とラウドネス調整（適度なコンプ処理）しラウドネス管理をした音源を流し、最大で17dBの音量差の違いを説明して頂いた。膨大なデータベースを基に最近のヒット曲におけるラウドネス対応のお話など、大変興味のあるお話を伺えた。



池上 卓也氏

「レベル調整の考え方と実際（K特性による音量変化）」

メディアインテグレーション（山口氏）からはPro Toolsにラウドネスメーターをインストールし、元音源の平均値を計測し、ラウドネス音量管理での音量差異確認作業デモを行って頂いた。

ミックス～マスタリング作業現場で、どの様にしてラウドネス基準で音量を確認し、音創りに生かして行くかなど、実践形式でのプレゼンを頂きました。

*尚、メディア・インテグレーション（山口氏、岡田氏）にはラウドネスセミナーで使用する音源を事前にラウドネス調整頂き、今回のセミナーで有効活用させて頂きました。



山口 哲氏

<纏め>

今回でJAPRSラウドネス技術セミナーは3回目となりました。ライブレコーディングが増えて更にストリーミングで音楽が試聴されている現状、音楽制作（録音）にとってもラウドネス基準を理解する事は大変重要なテーマです。今回のセミナーでは一楽曲における音創りが、ラウドネス基準に大きく影響することなど、今までモヤモヤしていた事が大変明確になったのではと感じております。

講師の皆様にはお忙しい中、セミナー対応の準備～大変分かり易いプレゼン、本当に有難う御座いました。誌面をもって感謝申し上げます。



セミナー風景

CD 高音質技術勉強会「UHQCD / MQA-CD」実施報告

CD の音質を向上させる技術について、素材および製造方法（UHQCD）と CD マスター音源のエンコード（MQA）からのアプローチ、そしてその二つの融合による今後の展開について知ることにより、CD メディアの更なる可能性を探る勉強会を開催しました。

日時：令和元年 7 月 26 日（金）15：30 ～ 17：30

場所：東放学園音響専門学校 渋谷校舎 2A3 教室 & Ast

内容：【Ⅰ部】CD 高音質技術説明（2A3 教室）

進行：菊地 功氏／（株）ミキサーズラボ副会長

ワーナーミュージック・マスタリング

①UHQCD について

講師：沼能 隆氏／メモリーテック株式会社 UHQ 推進部

②MQA-CD について

講師：鈴木 弘明氏、三上 勉氏／MQA Limited.

③UHQCD と MQA-CD の融合（ヨーロッパにおける CD 市場動向等について）

講師：沼能 隆氏／メモリーテック株式会社 UHQ 推進部

【Ⅱ部】比較試聴（Ast、2 グループに分かれての試聴）

UHQCD：DDP マスター／通常 CD／UHQCD の比較試聴

MQA-CD：通常 CD フォーマット／MQA エンコード／

MQA Studio（フルデコード）の比較試聴



司会進行 菊地 功氏

CD 高音質技術勉強会「UHQCD / MQA-CD」参加者感想

Winns Mastering マスタリングエンジニア

栗飯原友美

CD 高音質技術勉強会は、UHQCD と MQA-CD についての勉強会ということでマスタリングに直結する内容で興味深いものでした。

世界的にみて、日本はまだパッケージの市場が大きく、より高音質でリスナーに届いて欲しいというのはアーティストやエンジニア、その制作に関わる人達には大きな課題であると言えます。今回、メモリーテックの UHQCD の技術開発の話を聞いて、そういった制作側そしてエンドユーザーの気持ちにより応えようという情熱を感じました。DDP マスターとの聴き比べが出来たことが非常にわかりやすく、UHQCD がよりマスター原音に近いサウンドを追求してきたなと感じました。

また、パッケージと同時にハイレゾ配信をする作品も多い中、MQA-CD の技術はパッケージでもハイレゾ配信により近いサウンドを届けようといったもので、質感、空気感などで非常にクオリティの高いものだ実感、今までなかなかハイレゾ作品の購入に至らなかったユーザー層の方には、より身近になったのではないかと思います。すでに UHQCD と MQA-CD を組み合わせた作品も発売されていると



沼能 隆氏



鈴木 弘明氏

のことで、パッケージでも、よりマスター原音に近く臨場感のあるサウンドを聴くことが出来るようになってきたというのは素晴らしいことだと思います。MQA-CDのエンコードに関してはブラックボックスに包まれているようなところもありますが、エンコード後の音を事前に確認してそのままリリースしてOKかどうか決めることが出来るので利用しやすいですね。MQA-CDをデコード出来るプレーヤーも増えてきているということもあり、今後さらに発売タイトルが増えていくと音楽業界にも新たな可能性に活気が生まれるように思いました。



三上 勉氏

この勉強会には多くのエンジニアが参加しており、エンドユーザーに届くマスタークオリティがより良いものであることへの期待と関心の高さを感じました。



比較試聴コーナー

賛助会員交流会

8月6日（火）、「南国ダイニング」に於いて、賛助会員13社22名（9月からの新加盟社含む）、法人正会員7社13名、個人正会員4名、関連会社1名、事務局3名の計43名の参加者により賛助会員交流会が実施された。

今回も昨年に続き賛助会員だけではなく、正会員社からの参加も募った結果、多くの参加をいただき、賛助会員と正会員スタジオ各社との積極的な意見交換や、各社の機材やシステムに関する詳細な会話が随所に見受けられ、幅広く交流が図れる会となった。



第 16 回 JAPRS 認定「Pro Tools 技術認定試験」実施報告

9月8日(日)、札幌×2、仙台×3、新潟、小山、東京×8、横浜、名古屋×3、大阪×3、広島、博多の10地区24ヶ所の団体受験会場に分散して、「第16回JAPRS認定Pro Tools技術認定試験」が実施されました。本年度の受験者数は、昨年度の582名に対して572名という結果となりました。

また、今回の試験については、昨年と同様に受験者個々のPro Toolsに関する知識をより明確に把握するために、初級50問(500点)、中級50問(500点)の出題構成とし、それぞれ「Pro Tools 概要」「録音・編集」「ミキシング」「シンク・MIDI・ファイル管理など」に区分された出題としたが、初級問題の正答率は70.9%、中級問題については59.7%、全体的な正答率は65.3%という結果になりました。



HAL 東京

以下の通り実施結果の詳細を報告致します。

- (1) 受験申請者 655 名 欠席 83 名 受験者 582 名
最低点 20 点 最高点 1,000 点 (13 名) 総合平均点 647.8 点

(2) 平均点詳細

初級 1 (Pro Tools 概要 / 100 点) : 81.3 点
初級 2 (録音・編集 / 130 点) : 93.4 点
初級 3 (ミキシング / 130 点) : 88.0 点
初級 4 (シンク・MIDI・ファイル管理など / 140 点) : 87.9 点

◆初級計 350.6 点

中級 1 (Pro Tools 概要 / 100 点) : 61.9 点
中級 2 (録音・編集 / 120 点) : 68.7 点
中級 3 (ミキシング / 110 点) : 67.1 点
中級 4 (シンク・MIDI・ファイル管理など / 170 点) : 99.5 点

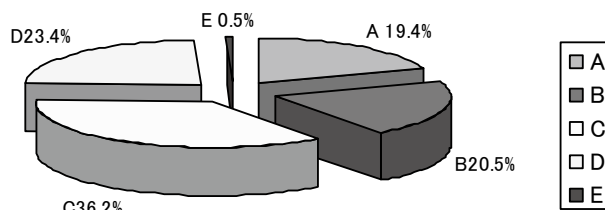
◆中級計 297.2 点

(3) 得点別人数

1000 ~ 900	119 名
890 ~ 800	62 名
790 ~ 700	54 名
690 ~ 600	74 名
590 ~ 500	88 名
490 ~ 400	94 名
390 ~ 300	63 名
290 ~ 200	17 名
200 ~	1 名
計	572 名

(4) ランク別人数

A ランク	1000 ~ 901 点	111 名
B	900 ~ 701 点	117 名
C	700 ~ 451 点	207 名
D	450 ~ 201 点	134 名
E	200 点以下	3 名
計		572 名



「アンビソニックス・3D オーディオ勉強会」実施報告

技術委員長 高田 英男

<主旨>

スタジオ録音を中心に音楽録音制作をしているエンジニアにとって、サラウンド制作については、5.1ch サラウンドが基本となっているが、音響再生技術・VR 技術のビジネス化などにより、ゲーム音楽・映画音楽などで 3D オーディオによる音楽制作（ハイトチャンネル）を用いたアンビソニックス・オーディオ、Dolby Atmos など、音楽制作では更なるクリエイティブ力が求められている現状である。その為、JAPRS 技術セミナーとして 3D オーディオのスペシャリストにお願いし、アンビソニックス・3D オーディオセミナーを企画実施した。



高田技術委員長

日時：令和元年 9 月 10 日（火） 13:00 ～ 17:30

場所：東京藝術大学 千住キャンパス・新館 3F Studio A、B

(A) 講義 1：「3D オーディオの歴史と Ambisonics の概要」

講師：東京藝術大学・音楽学部・音楽環境創造科

亀川 徹 教授



亀川 徹教授

(B) 録音セッション（パーカッションのソロ演奏を各種収録方法により録音）

録音監修：株式会社 dream window 代表 深田 晃 氏

パーカッション演奏：梯 郁夫氏

- ・ Ambisonics A フォーマット (Sound field SPS200)
- ・ Spaced microphone array (全指向性 5 本 + 単一指向性 4 本)
- ・ Spot microphone (楽器配置に合わせて数本)

CR (Control room) : 5.1ch によるモニター

○ 試聴

CR : Ambisonics → 5ch Studio B : Ambisonics → 22ch



深田 晃氏



パーカッション奏者 梯 郁夫氏



東京藝術大学 StudioA

(C) 講義 2：

「IEM plug-in を用いた Spot マイクの Ambisonics 処理」

講師：株式会社エムアイセブン ジャパン

B2B セールスディレクター 三橋 武氏



三橋 武氏

(D) 講義3：「Ambisonicsの特徴と有効な使い方」

講師：株式会社アコースティックフィールド

代表取締役 久保 二郎氏



久保 二郎氏

(E) 試聴コーナー（参加者を A、B の2グループに分けて実施）

HOA (higher-order ambisonics)、IEM Plug-in による再生の体験試聴

・ 5ch (Studio A コントロールルームにて)

・ 22ch (Studio B にて)

CR：Ambisonics → 5ch

Studio B：Ambisonics → 22ch

A グループ：HOA(久保氏) B グループ：IEM(三橋氏)

B グループ：HOA(久保氏) A グループ：IEM(三橋氏)

B グループ：IEM(三橋氏) A グループ：HOA(久保氏)

A グループ：IEM(三橋氏) B グループ：HOA(久保氏)



StudioB 22ch 試聴の様子

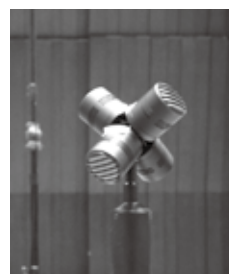
<概要～感想>

東京藝術大学 千住キャンパス・スタジオには5.1chサラウンド再生環境と22.2chの再生環境があり、それぞれの再生環境にてサラウンドによるクリエイティブな音場再生が体験出来るスタジオである。セミナーはアンビソニックス・3D オーディオの基礎講座として、東京藝術大学 亀川 徹教授に3D オーディオの歴史とアンビソニックスの概要（高次アンビソニックス含む）講義、(株)エムアイセブンジャパン B2B セールスディレクター 三橋 武氏から既存の音源を IEM plug-in を用いたアンビソニックスの制作について、(株)アコースティックフィールド 代表取締役 久保 二郎氏からはアンビソニックスの特徴と有効な活用について講義を受ける。



勉強会風景

更に今回パーカッション奏者(梯 郁夫氏)による演奏を、録音監修：(株)dream Window 代表 深田 晃氏及び、東京藝術大学・亀川 徹教授のプランニングによるマイキング(Sound field SPS200・全指向性5本+無指向性4本・スポットマイク)をスタジオに設置し、梯氏には移動しながらパーカッション演奏をして頂き、音源の軌跡(動線)を、5.1chサラウンド～22.2chシステムを使って3Dオーディオによる、音場空間再生をリアルに体験する事が出来た。



Sound field SPS200

アンビソニックス・3Dオーディオは、より自然な音場空間を創り出せる技術であり、更にクリエイティブな音場空間創りにより、音楽表現の新たな可能性を探究できる技術である。音楽制作に対し録音エンジニアの役割も、音楽内容に合わせマイキング～音創りを進めて行く中、エンジニアから音楽創りに対し積極的にプロデュースする力が求められており、特に3Dオーディオなどエンジニア領域に深く関わる音楽表現について、更なる録音技術の習得が求められており、音楽と音創り(サウンドプロデュース)の深さを体験出来たセミナーであった。

最後になりましたが、講師の皆様・パーカッション演奏者(梯氏)・東京藝術大学にてセミナー協力して頂きました学生の皆様に、誌面を通して感謝を申し上げます。

JAPRS技術セミナー

アンビソニックス 3Dオーディオ勉強会

東京藝術大学 亀川 徹

2019.9.10

3Dオーディオ

- ★ **チャンネルベース方式**：あらかじめ決められたチャンネル数に応じたスピーカ配置で制作される(Auro 9.1, 22.2 マルチチャンネル音響など)
- ★ **オブジェクトベース方式**：音素材そのもののデータと空間の位置情報などのメタデータを伝送あるいは収録して、それらを再生環境に応じて再構築する(Dolby Atmos, Auro Max, DTS:X など)
- ★ **シーンベース方式**：実際の音場を物理的に再現する(Ambisonics, WFS, BoSC方式など)

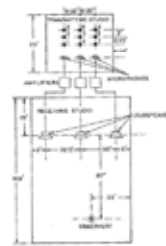
立体音響再生技術の発展の歴史

1881 パリ万博アデルの実験 (シアトロフォン)

- 1911 プラムラインがステレオ収録の特許を取得
- 1933 ベル研究所の立体音響実験の実験
- 1940 ディズニー・ファンタジア
- 1952 ラジオ放送2波によるステレオ放送
- 1958 ステレオレコード発売
- 1970 大阪万博での立体音響再生の試み
- 1970 4chステレオレコード発売
- 1976 ドルビーステレオ
- 1977 M. Gerson "Phonograph With Height Sound Reproduction" (AES J) アンビソニックス
- 1980 Prof. Burkhardt "ホーヘンスの演壇に基づく遠隔放送" (AES J) → WFS (wave field synthesis)
- 1990 ハイビジョン放送 (5.1サラウンド)
- 1996 DVD (5.1サラウンド)
- 1999 SACD (5.1サラウンド)
- 2000 BDデジタル放送 (5.1サラウンド)
- 2003 Blu-ray (7.1サラウンド)
- 2005 22.2マルチチャンネル音響
- 2012 Dolby Atmos
- 2007 7.1 "サウンドシステム"

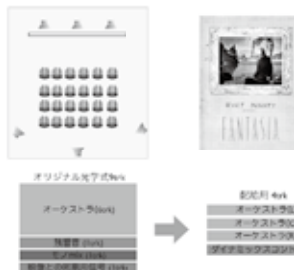
Bell研究所立体音響実験 (1933)

- 3チャンネルのステレオ音声のデモンストレーション
- フィラデルフィアでフィラデルフィア管弦楽団が演奏した音声をワシントンD.C.のホールに生中継
- 指揮者のレオポルド・ストコフスキーが、ホールでミキシングするというデモンストレーションを実施



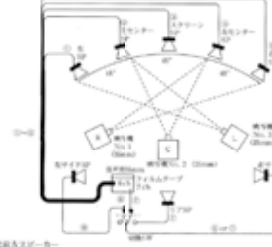
JAPRS 3D Audio Seminar 2019/9/10, Tokyo, Kanakana

ディズニー/ファンタジア (1940)



JAPRS 3D Audio Seminar 2019/9/10, Tokyo, Kanakana

シネラマ方式 (1950年代)



①～④は左右スピーカー
⑤⑥は左右サラウンド用スピーカーに接続または左右スピーカーとリアスピーカーに接続される

JAPRS 3D Audio Seminar 2019/9/10, Tokyo, Kanakana

立体音楽堂

- ◆ 中波放送2波による立体音響実験
- ◆ 1952年 NHKが第1放送と第2放送を用いて実験放送を開始
- ◆ 1954年～ 「立体音楽堂」として定時放送開始
- ◆ 1958年 文化放送とニッポン放送にタイアップで民放2波によるステレオ放送が実現
- ◆ 1963年 FM放送の開始とともに1964年に終了



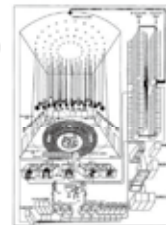
引用元：http://www.japrs.com/japrs/Photo.html

JAPRS 3D Audio Seminar 2019/9/10, Tokyo, Kanakana

大阪万博での立体音響再生の試み (1970)

「YEARS OF EAR "What is music?"」
武満 徹 (1970、大阪万博/鉄鋼館)

- ◆ 「6トラックの録音機を4台同期運転して1008個のスピーカによる再生システム」
- ◆ 世界の作曲家に「音楽とは何か」について質問した答えをテープに記録し、音源の配置を時間と空間に配置するという作品



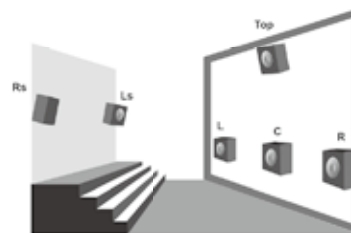
JAPRS 3D Audio Seminar 2019/9/10, Tokyo, Kanakana

大阪万博での立体音響再生の試み (1970)



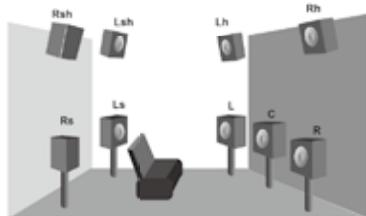
JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

I-Max (6ch)



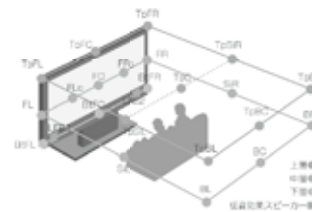
JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

Auro-3D (2006)



JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

22.2マルチチャンネル音響



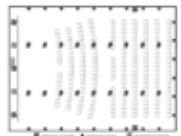
22.2マルチチャンネル音響のチャンネル配置の概略図

JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

Dolby Atmos (2012)



- ★ 4K映像のデジタルシネマに対応した音画方式
- ★ オブジェクト+空間情報
- ★ 最大64chのスピーカーに対応
- ★ システムに応じて最適にマッピング



Kamekura

Dolby Atmos Home (2014)

9.1.2 channel



7.1.4 channel



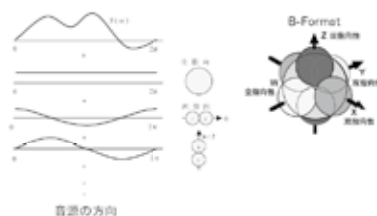
JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

シーンベース方式

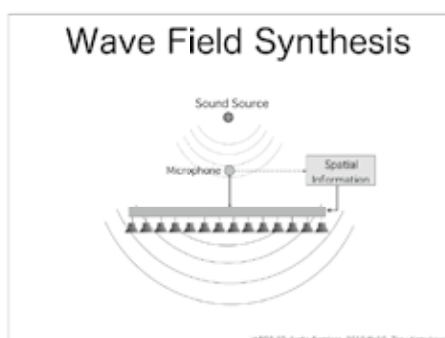
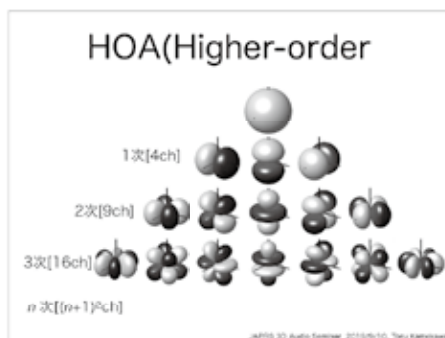
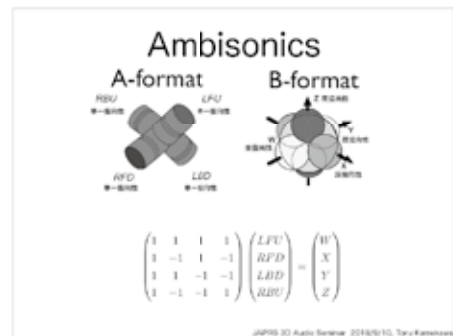
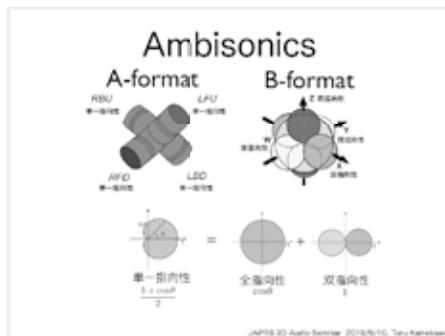
- ★ HOA (Higher Order Ambisonics)
- ★ WFS (Wave Field Synthesis)
- ★ BoSC (Boundary Surface Control)

JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura

Ambisonics

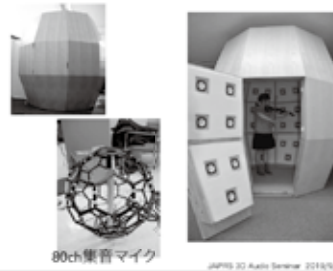


JAPTS 3D Audio Seminar, 2015/5/10, Toru Kamekura





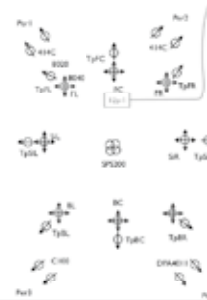
音響樽 (BoSCシステム)



音響樽 (BoSCシステム)



今回の録音プラン



JAPRS様へ
「アンビソニックス・3Dオーディオ体験会」

IEM Plug-in Suite のご紹介

株式会社エムアイセージジャパン | 三橋氏



最初に...

WHAT I REALLY WANT TO TELL YOU

- ▶ 誰でも簡単にアンビソニックスコンテンツを作ることができます。
- ▶ アンビソニック用のマイクロフォンなど特別な機材は必要ありません
- ▶ もちろん高価な機材も必要ありません

- ▶ 必要なのは...
- ▶ IEM Plug-ins
- ▶ オーディオファイル
- ▶ ヘッドフォン (またはスピーカー)



最初に...

DAW?

DAW

AMBISONICSに必要な内部バスチャンネル

1次アンビソニックス	4チャンネル
2次アンビソニックス	9チャンネル
3次アンビソニックス	16チャンネル
4次アンビソニックス	25チャンネル
5次アンビソニックス	36チャンネル
6次アンビソニックス	49チャンネル
7次アンビソニックス	64チャンネル

DAW

AMBISONICSに必要な内部バスチャンネル

1次アンビソニックス	4チャンネル
2次アンビソニックス	9チャンネル
3次アンビソニックス	16チャンネル
4次アンビソニックス	25チャンネル
5次アンビソニックス	36チャンネル
6次アンビソニックス	49チャンネル
7次アンビソニックス	64チャンネル



DAW

AMBISONICSに必要な内部バスチャンネル

1次アンビソニックス	4チャンネル
2次アンビソニックス	9チャンネル
3次アンビソニックス	16チャンネル
4次アンビソニックス	25チャンネル
5次アンビソニックス	36チャンネル
6次アンビソニックス	49チャンネル
7次アンビソニックス	64チャンネル

▶ NUENDO ◀ CUBASE

DAW

AMBISONICSに必要な内部バスチャンネル

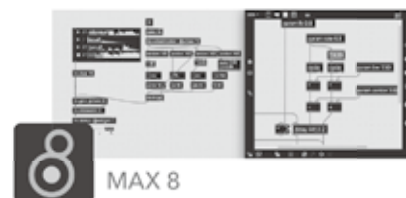
1次アンビソニックス	4チャンネル
2次アンビソニックス	9チャンネル
3次アンビソニックス	16チャンネル
4次アンビソニックス	25チャンネル
5次アンビソニックス	36チャンネル
6次アンビソニックス	49チャンネル
7次アンビソニックス	64チャンネル

▶ NUENDO ◀ CUBASE



DAW

MAX 8



DAW

REAPER



ITEM PLUG-IN SUITE



ITEM PLUG-IN SUITE

ITEM PLUG-IN SUITE : 作者



ダニエル・ルードリッヒ氏 | Daniel Rudrich
グラーツ国立音楽大学
ユニオン・エレクトロニクスで電気工学を学ぶ。2015年、オーストリアのグラーツの
工科大学、音楽大学、そしてグラーツの舞台芸術で、電気工学と音楽工学を学
ぶ。2017年、グラーツの電子音楽教育研究所に入社し、博士課程の取得を目指
す。Ambisonicsの3D音場録音における音場のパラメータ化に専念する。研究
を行う。



INTRODUCING THE IEM PLUG-IN SUITE

ITEM PLUG-IN SUITE

エンコーダー	エンベクトル	ツール
StereoEncoder	DualDelay	EnergyVisualizer
MultEncoder	I-DirHverb	ToolBox
RoomEncoder	MultEQ	ProbeDecoder
DirectivityShaper	SceneRotator	MatrixMultiplier
デコーダー	デコーダー	デコーダー
OmniCompressor	AIRADecoder	DistanceCompensator
DirectionalCompressor	SimpleDecoder	CoordinateConverter
	BinauralDecoder	

ITEM PLUG-IN SUITE



INTRODUCING THE IEM PLUG-IN SUITE

INTERFACE: SIGNAL TYPES シグナルの種類



INTRODUCING THE IEM PLUG-IN SUITE

INTERFACE: SIGNAL TYPES シグナルの種類



INTRODUCING THE IEM PLUG-IN SUITE

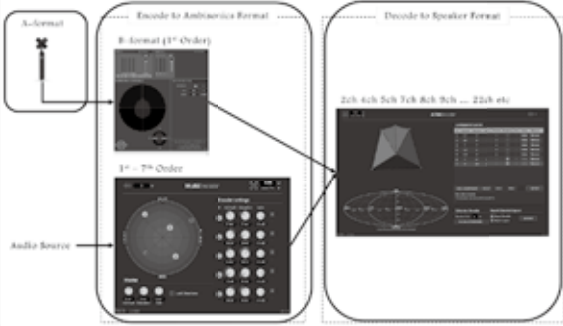
INTERFACE: SIGNAL TYPES



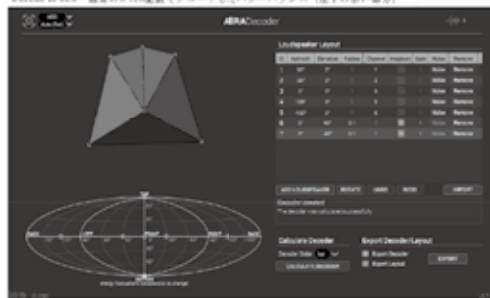
INTERFACE: CHANNELS / ORDER SELECT アンビソニックス次数選択



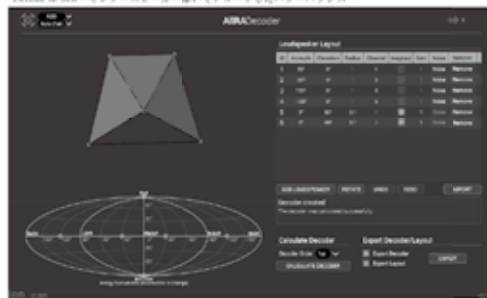
DEMO

JAFPS技術セミナー 「アンビソニックス・3Dオーディオ勉強会」 2019年9月10日 Ambisonicsの特徴と有効な使い方 久保二郎 (株式会社アコースティックフィールド)	自己紹介 1993年～2008年、株式会社タイムロードにてプロオーディオ担当。 APL, SONTEC, dCS, PrismSound, CEDAR, ULTRASONICなどの 高品位な業務用オーディオ機器を扱う。 1996年ころ、Lake Technology社「Huren」の取り扱い開始と共に 企業や大学のR&Dへ特殊音響システムを提案する部署が立ち上がり プロオーディオ部門と兼任。 顧客に鹿島建設、大林組、戸田建設、NTT、NHK、東京大学、九州 大学、など。
立体音響との出会い Hurenユーザーの研究開発内容 リアルタイムのバイノーラルプロセッシング リアルタイムのホール音場シミュレーション バーチャルリアリティなど 立体的かつ投入感ある音響システムの構築が求められる。 バイノーラル、3Dパンニング、そしてAmbisonicsを利用。	音楽制作の事例 非常に少ない。なぜか。 Ambisonicsのサウンドの特徴を理解していないため 有効な使い方を見出せていない。 水平5.1ch再生くらいであれば、5本マイクを設置してミックスした 方が音が良くミックスの自由度も高い。 マイク収録以外の使い方を知らない。
Ambisonicsの利点 「簡単」「便利」「臨場感」 聴かせたい音場にマイクを1本設置するだけ。 4chなので対応するレコーダーも多く、長距離の伝送も容易。 後からあらゆるスピーカー数と配置にデコードできる。回転もできる。 マルチマイク収録をミキシングし作り込んだ臨場感とは異なり ワンポイント収録ならではの一体感ある立体音場を生成できる。	それゆえに マイクの設置位置が大変重要。 全方位の音が録れてしまうため、 前後左右上下のバランスや、 他の音源とミックスする際のバ ランスを予め考えた上で最適な 位置を決める必要がある。 
スピーカーデコードの考え方 Ambisonicsはスピーカーの数、配置を自由に設定できるため、 あらゆるフォーマットに対応する柔軟性がある。 しかし、何でも叶えてくれる魔法の箱ではない。 デコードの設定が鍵を握る。 デコードの段階では、出来るだけ無理のない処理をさせ、全方位の 音を無駄なく均一に生成しておくのが良い。 そのうえで出力後の実スピーカーで音響調整を行うべき。	

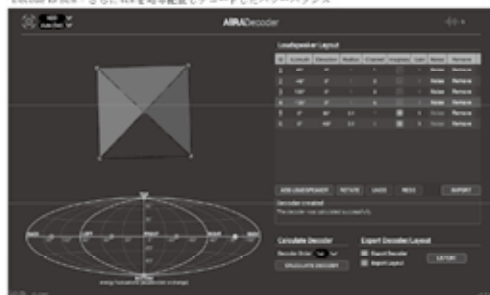
Decode to 8ch - 通常の8ch配置でデコードしたパワーバランス (左下の赤い部分)



Decode to 8ch - センタースピーカー置いてデコードしたパワーバランス



Decode to 8ch - さらに4chも同等配置しデコードしたパワーバランス



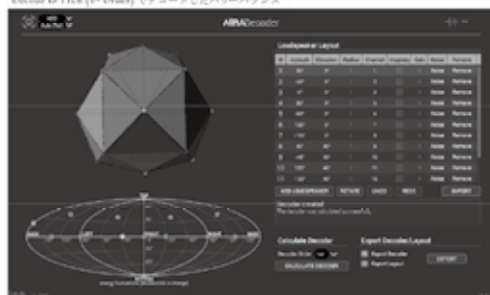
何次が良いのか？

1次、2次、3次の変化は比較的大きい。
それ以降の変化は少ない。

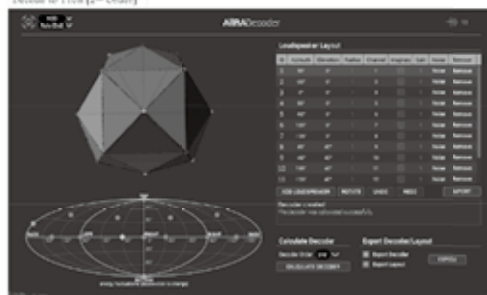
実スピーカー数と同程度のch数の次数で十分。
Ambisonicsの特徴を活かすのであれば、少ないch数で空間を埋めた方が多い。

おすすめは2次。
(コンテンツと再生環境によっては7次が良いこともある)

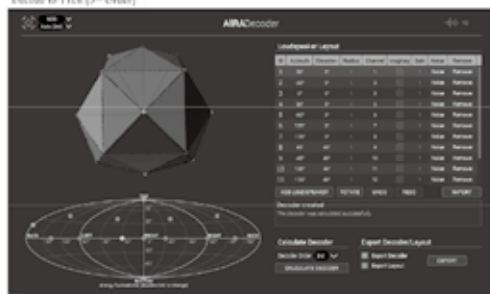
Decode to 11ch (1st Order) でデコードしたパワーバランス



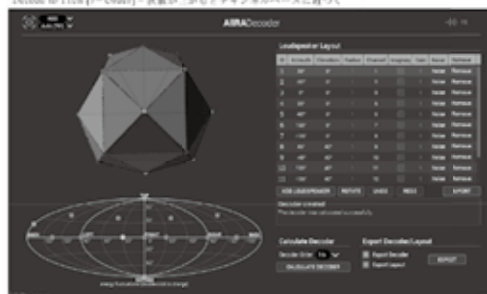
Decode to 11ch (2nd Order)



Decode to 11ch (3rd Order)



Decode to 11ch (7th Order) - 次数が上がるチャンネル数に達する

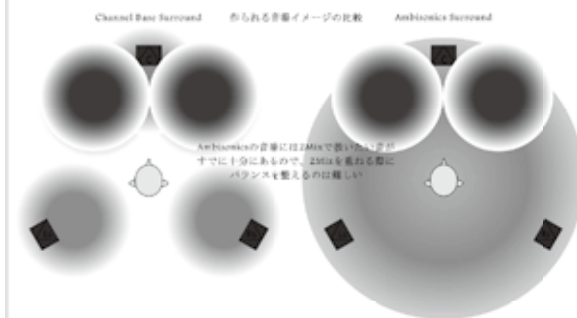
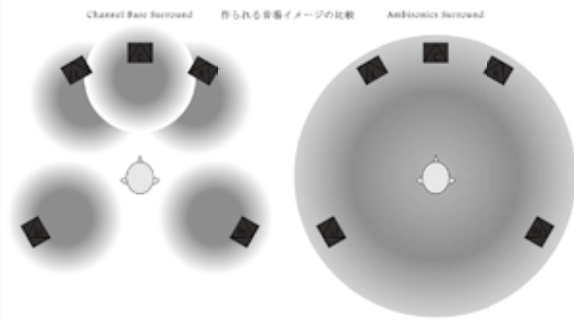


ミックスの考え方

Ambisonicsの音と他の音をミックスするのであれば、Ambisonicsサウンドを活かすミックスをしないと意味が無い。

つまり「その場に居るような、一体感ある立体音場を目指す。

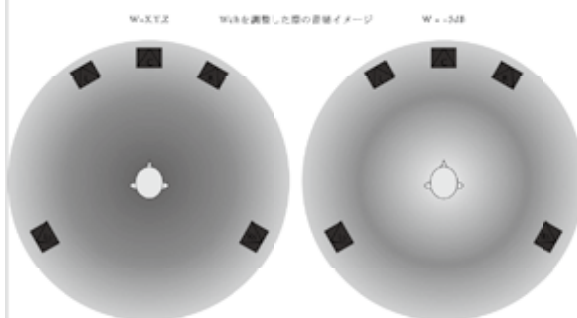
そうでなければ、サラウンド収録は通常のチャンネルベースの方法でよい。



設定のポイント

Ambisonicsのサウンドには一体感がある。それが時には音場を狭いと感じさせてしまう。そんな時サウンドに少し広がりを持たせる調整方法。

1次のAmbisonicsを例にとるとその4chはW X Y Zで構成されている。X Y Zは双指向。Wは全指向。このWがAmbisonicsを一つの音場にまとめている。よってこのWを-2dB、-3dBとすることで、音場は広がって聞こえる。(FuMaの場合)



試聴

以上を踏まえAmbisonicsの特徴を実際に試聴体験。5chと22chのスピーカーシステムで以下の音源を比較。

A-formatマイクで録音した様々な環境音
1次から7次までのパンニングによる音の比較
A-formatマイクで録音した音源をミックスして作られた音楽作品

第 31 回 JAPRS ゴルフコンペ

10月18日（金）、昨年に続き神奈川県厚木市の大厚木カントリークラブ桜コースにおいて、第31回目を迎えたJAPRS ゴルフコンペが開催された。参加者はJAPRS 法人正会員7社10名、個人正会員3名、賛助会員3社3名、JAPRS 会員OB 3名、関連会社等14名 合計9組33名で、早朝8:00に集合しクラブハウスの受付が完了しました。

8:45にクラブハウス前集合となり、コンペ幹事の稲葉建設（株）・萩原 一哉氏よりルール等の説明の後、参加者全員の記念写真を撮影後にIN、OUTコースに分かれ、無事にコンペがスタート。

競技終了後、クラブハウス2Fにおいてパーティーが開催され、本年度の優勝者・萩原一哉氏をはじめ、各賞が参加者に手渡され、最後に清水総務委員長の挨拶が行われ、無事にコンペ終了。



優勝・萩原 一哉氏



クラブハウス・パーティー会場



清水委員長

＜主な成績＞

優勝：萩原 一哉／稲葉建設	GROSS	81	NET	71.4
準優勝：高橋 哲也／太陽保険事務所	〃	93	〃	73.8
3 位：藤井 政直／元バーディハウス	〃	90	〃	74.4
ベストグロス賞：萩原 一哉／稲葉建設	GROSS	81 (OUT 45, IN 36)		
ニアピン賞：佐々木 高志、椎名 和夫、石野 和男、高根 護康				
ドラコン賞：永井 美由紀、鈴木 高雄、萩原 一哉、高橋 邦明				(敬称略)



スタート前の集合写真

中国交流プロジェクト 北京視察ツアーレポート

昨今の中国経済の成長と音楽市場の拡大に伴い、当協会会員社のスタジオにおいても従来のアメリカや韓国のクライアントに加えて、中国のクライアントからの問い合わせが見受けられるようになりましたが、商習慣の違いや言葉の問題、決済に関する不安等から積極的な受注に至っていない状況があり、これらの障壁を乗り越えてインバウンド需要を取り込むべく、計3回のシリーズ「中華圏セミナー」を実施しました。

今年度は中国（北京）を訪問し、音楽ビジネスをされている各企業にお伺いし、実際に顔を合わせてのビジネスミーティングをしながら、今後に向けてのネットワークの構築を進めるため、11月10日（日）～11月13（水）到北京訪問ツアーを実施いたしました。

北京ツアーには JAPRS だけではなく、東京音楽事業者連盟、（一社）演奏家権利処理合同機構 MPN からの参加をいただき、レコーディング三者協議会（ref）として北京を訪問して来ました。



太合音楽集団



中国録音師協会音楽委員会（モダンスカイ）



HIFIVE



中国録音師協会音響芸術専門委員会（金田音楽スタジオ）



中信出版集团



西瓜音楽集団

JAPRS 中国交流プロジェクト北京ツアーに参加して

株式会社サウンド・シティ
営業部部长 明地 権

レコーディングスタジオを取り巻く環境が依然として厳しい中、ビジネスチャンスはドメスティックだけではなく、ワールドワイドで捉えたい。中国にフォーカスして、ビジネスチャンスを探る勉強を渉外委員会では進めて参りました。その流れを受けて、2019年11月10日～13日にかけて中国北京への交流ツアーを実施し、私も参加してまいりました。

参加メンバーは、JAPRS より高田英男会長をはじめ6名、東京音楽事業者連盟（音事連）より大野祥孝理事長（新音楽協会）をはじめ3名、演奏家権利処理合同機構 MPN 高村宏氏をはじめ2名の合計11名。レコーディング三者協議会（通称：ref）の三団体が揃っての訪問となりました。ツアーのコーディネートおよびコミュニケーションを、ビクタースタジオ出身で北京在住の栗野敬三氏、そして北京で長く仕事をされている安田玲美氏に担っていただき、両氏のご尽力により様々な団体へのアポイントを実現することが出来ました。太合音楽、モダンスカイ、HIFIVE、中国デジタル文化集団及び関連業界団体、中信出版社、希瓜ミュージックを訪問して、活発な意見交換を行ってきました。

我々は、事前に用意した日本の紹介動画を用いながら、日本のレコーディングについて説明を行いました。「日本のスタジオ・制作環境 紹介動画」、「音響ハウス ドキュメンタリー映画（ダイジェスト版）」、「関口台スタジオ ダイレクトカットティング動画」、「ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリングの高音質アナログレコード制作動画」の4つの動画を準備しました。ヴァストミュージックエージェンシー 大崎氏 ディレクションによる日本のスタジオおよび制作環境の紹介動画は、①東京のイメージ、②レコーディングの風景、③スタジオの紹介、④マスタリング・カットティング・ハイレゾの紹介で構成し、「QUALITY（旨さ）」、「SPEEDY（速さ）」、「ACCURACY（確かさ）」の3点を訴求ポイントとし、「High Quality Recording experience in Japan（高品質な日本でのレコーディング体験）」を訴えました。音響ハウス ドキュメンタリー映画は日本のレコーディング技術を凝縮した映像作品で、今回はダイジェスト版ながらそのクオリティに現地の方々も感嘆の声をあげていました。JAPRS、音事連、MPN の三団体で訪問できたことにより、日本での音楽制作を様々な角度から説明をすることができました。

帰国後の ref 連絡会で、実施内容や感想について報告された一部を下記に記載します。

- ・先ずは今回のツアーをコーディネートしてくれた栗野氏、安田氏に感謝をしたい。訪問先もバラエティーに富み、また通訳によりコミュニケーションの質が変わることも実感させられた。
- ・中国音楽制作に関わるスタッフの若さとスピーディーさを実感し刺激の多いツアーであった。
- ・私たちが訪問した記事を直ぐに HP、wechat へアップする等フットワークの軽さを感じた。
- ・中国について発展はしているが日本から遅れているという固定概念を持っていたが、実際には日本よりも近代化されている部分も多々あり、学ぶべき点が多かった。
- ・スタジオについては日本より最新技術の取込みに関心が高く、それに比べて日本は設備投資をしていないと感じられた。

- ・送金の問題はやはり大きく、送金のやり取りをする度に掛かる経費や手間を抑えるための工夫も必要であると感じられた。（デポジットなど）
- ・「国外に外貨を出さない」これが商取引を考える際の一番の壁となっている。
- ・中国は考えていたより英語を使用する人が少なく、コミュニケーション対応が難しい。
- ・中国側は制作コストを低く抑えると言う意識が強かったが、その代りに制作件数の多さにおけるボリュームメリットをどう考えて制作の取り込みに臨むのか。
- ・一番高いと言われるスタジオでもエンジニア料込で1時間16,000円程度との話だったが、その内容について再度確認をしたい。
- ・日本で録音されたストリングスの音色が評価されていた。（柔らかい、広がり）
- ・ファイルの受け渡しだけで行うレコーディングについて関心が高い会社があった。（日本でミックスやマスタリングを行なった際の仕上がりに対する意見反映の仕方など）
- ・アナログディスクのカッティングについて興味を持っているようであった。

私個人としても非常に有意義な渡航になり、中国という国の限らない可能性を感じることができました。最も印象に残ったのは、とにかくスタッフが若いこと。中心は20代から30代。訪問したHIFIVE CEO マギー・チョウ氏は30代前半の女性でした。日本の音楽関連会社でその若さで会社を引っ張る人材はいますでしょうか。そして、変化に柔軟な民族であること。ビジネスの場で名刺交換をすることはなく、Wechatで連絡先を交換するのが主流だとのことでした。日本で言えば、LINEを交換するようなものです。キャッシュレスなどの新しいテクノロジーにも貧富を問わず多くの人が対応しています。そして、即断即決する文化。人口が世界一多い国が、圧倒的なスピード感でビジネスを行う…それは脅威でしかありません。「日本人がコンサバティブなままでは、中国人には勝てない」、そんな意識が強く芽生え、自分の業務への取り組み方、時間を考えさせられる良いキッカケになりました。自社だけでなく、業界全体にプラスのフィードバックができるように自分自身に喝を入れていこうと思います。

現実的な収穫として最も大きかったのは、中国録音師協会と録音技術面での交流が進みそうなことだと思います。JAPRS 高田会長と中国録音師協会の方々との良質の音を深く探求する熱い意見交換を目の当たりにし、このようにして国交が深まっていくのだなと感じました。

プレゼン資料の作成、提供にご尽力をいただいた皆様。そして、今回のツアーの成功に尽力をいただいた内藤事務局長にこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

○北京ツアーに参加の ref 2 団体から感想をいただきました。

東京音楽事業者連盟

この度の訪問により、より一層のクオリティー向上及び PR、若い世代に響くようなアイデア、付加価値を見出していくことが肝要と感じた。

訪問先企業のオーナー、スタッフは、20～30代を中心に運営、チームを組み制作活動を行っている。コスト面もシビアに捉え、日本でのメリットとは何かを問われている。来年は東京 2020 オリンピックイヤーでもあり、日本カルチャーも世界から注目される。

今回の誘致・視察をベースにブラッシュアップしつつ、PR、ネットワークの拡充を図っていきたい。

(一社) 演奏家権利処理合同機構 MPN
根岸 義久氏

今回の訪中は、中国での録音環境や音楽制作の仕方、コンテンツに対する考え方などを知ることができる大変良い機会となりました。

日中両国ならではの『クオリティとコスト』の両面がバランスよくミックスした新たな制作スタイルを確立する足掛かりになったものと感じています。

しかし、契約から現場に至るまで、予め文化習慣の違いを正しく理解していかなければ、思わぬ事態を招かないとも限りません。

今後の更なる交流の必要性を強く感じました。中華料理は辛かったです。

Inter BEE 2019 賛助会員社ブースツアーレポート

(株)メディア・インテグレーション
岡田 詞朗

2019年11月13日(水)から11月15日(金)の3日間に渡り、幕張メッセ(千葉市美浜区)にて一般社団法人電子情報技術産業協会主催のInter BEE 2019／第55回 2019年国際放送機器展が開催されました。

Inter BEEでは近年デジタル・トランスフォーメーション時代におけるメディア産業の新たなユーザエクスペリエンスを提示する展示会として、「新たなメディアの可能性を世界に伝えよう。」のスローガンのもと、「コンテンツ」を中核に位置づけ、「つくる(制作)」「おくる(伝送)」「うける(体験)」の要素を網羅した「メディア総合イベント」に変容することを目指しています。また今年は東京オリンピック、パラリンピック開催の前年ということもあり、スポーツ関連に随所で焦点が当てられておりました。

過去最多となる出展者数1,158社／団体(2018年：1,152社／団体)、出展小間数2,125小間(2018年：2,054小間)で、幕張メッセ国際展示場ホール1からホール8までの全館54,000㎡およびイベントホール(こちらイベントホールでは恒例企画の「INTER BEE EXPERIENCE」が今年も実施され、過去最多の15ブランド18製品のSRスピーカ体験デモが実施されておりました。)を使用されておりました。

今年も11月14日(木)に7回目となる「Inter BEE 2019 賛助会員社ブースツアー」を開催させて頂きました。今年は18名の参加と昨年より若干少なかったのですが、ツアー対象先は20社となり最多を記録した昨年と同様の実施となりました。今年もHALL.1～HALL.8の全フロアを対象に途中昼食を挿みつつの進行でしたが、およそ3.5時間で20社を訪問することができ、例年同様非常にスムーズな進行だったのでは、と思います。短時間で各ブースを訪問できることが本ブースツアーの良さではあるのですが、時間的制約で全てをお話しできなかった賛助会員がいらしかったことや、新規賛助会員へのアプローチ等が今後の課題と思われます。賛助委員会ではこれら反省点を踏まえ、今後開催予定の各種イベントを実施して参りたいと思います。

最後になりますが、ご協力頂きました事務局の方々、賛助企業各社のご担当者様、そしてツアーに参加頂いた方々、誠にありがとうございました。

Inter BEE 2019 賛助会員社ブースツアー参加会員 20 社

1. 株式会社アコースティックフィールド
2. 株式会社アユート
3. 株式会社エムアイセブンジャパン／株式会社シントックスジャパン
4. オタリテック株式会社
5. 株式会社オーディオテクニカ
6. 株式会社音響ハウス
7. 有限会社グルーヴ
8. 株式会社 サンフォニックス
9. 株式会社ジェネレックジャパン
10. 株式会社静科
11. シュア・ジャパン株式会社
12. 株式会社ズーム
13. ゼンハイザー・ジャパン株式会社
14. ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン株式会社
15. タックシステム株式会社
16. ヒビノインターサウンド株式会社
17. ミックスウェーブ株式会社
18. メモリーテック株式会社
19. 株式会社メディア・インテグレーション
20. 日本音響エンジニアリング株式会社



第 26 回日本プロ音楽録音賞授賞式 レポート

「日本プロ音楽録音賞」は、平成5年に当協会が制定した「JAPRS 録音賞」を出発点とし、音楽制作、録音に対する認識を高め、音楽産業の更なる質の向上、録音技術者の地位の確立などを目的として、平成6年より実施されているものです。

今回第26回目の実施にあたり、一般社団法人日本音楽スタジオ協会および一般社団法人日本オーディオ協会、特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の5団体が主催し、経済産業省の後援および日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、株式会社ステレオサウンドの協賛、サウンド&レコーディング・マガジン、CD ジャーナル、ステレオサウンド、プロサウンド、レコード芸術、オーディオアクセサリー、アナログ、ステレオの賛助、並びに NPO 法人ミュージックソムリエ協会、(株)レーベルゲート／mora、オンキヨー(株)／e-onkyo music、オトトイ(株)／OTOTOY、(株)ソニー・ミュージックソリューションズ、(株)JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント、(株)サウンドインスタジオ、(株)ジェネレックジャパン、(株)ミキサーズラボ／ワーナーミュージック・マスタリング、ミックスウェーブ(株)、東放学園音響専門学校、日本コロムビア(株)、(株)キング関口台スタジオ、(株)JVC ケンウッド・クリエイティブメディアの協力により「第26回日本プロ音楽録音賞」を実施し、令和元年12月6日(金)、半蔵門



内沼運営委員長

TOKYO FM ホールに於いて授賞式およびパーティーが開催され、受賞作品および受賞者の発表が行われました。

今回の授賞式も「音の日」のイベントとして開催され、はじめに内沼名誉会長が運営委員長として開会の辞を述べられ、続いてプロ音楽録音賞に対し後援を得ている経済産業省 商務情報政策局 コンテンツ産業課 課長補佐 中山 祥氏が来賓代表として挨拶された後、6部門計12作品、審査員特別賞1作品、アナログディスク特別賞1作品、およびベストパフォーマー賞並びにニュー・プロミネントマスター賞について表彰が行われました。



経済産業省商務情報政策局
コンテンツ産業課
課長補佐 中山 祥氏

応募作品の分類については以下の通りとし、審査は以下の6部門およびアナログディスク特別賞、ベストパフォーマー賞、ニュー・プロミネントマスター賞を対象に行われ、全160作品の応募からCD部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」：2作品、CD部門「ポップス、歌謡曲」：2作品、ハイレゾリューション部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」：2作品、ハイレゾリューション部門「ポップス、歌謡曲」：2作品、放送部門「2chステレオ」：2作品、放送部門「マルチchサラウンド」：2作品がそれぞれ優秀作品としてノミネートされ、その中から各部門1作品が最優秀作品として選定され、更にベストパフォーマー賞1作品、ニュー・プロミネントマスター賞2作品、アナログディスク特別賞1作品および放送部門から審査員特別賞1作品が選ばれました。

CD部門 クラシック、ジャズ、フュージョン／応募総数：22 作品
CD部門 ポップス、歌謡曲／応募総数：47 作品
ハイレゾリレーション部門 クラシック、ジャズ、フュージョン／応募総数：32 作品
(SACD、DVD、BD& ノンパッケージ作品)
ハイレゾリレーション部門 ポップス、歌謡曲／応募総数：12 作品
(SACD、DVD、BD& ノンパッケージ作品)
放送部門 2ch ステレオ／応募総数：23 作品
(ラジオ番組：AM、FM、衛星放送) (有線放送)
(テレビ番組：地上波、衛星放送)
放送部門 マルチ ch サラウンド／応募総数：10 作品
(テレビ番組：地上波、衛星放送)
ベストパフォーマー賞
ニュー・プロミネントマスター賞
アナログディスク特別賞：14 作品

今回は、各部門の最優秀作品、優秀作品、審査員特別賞およびベストパフォーマー賞、ニュー・プロミネントマスター賞、アナログディスク特別賞を紹介するとともに、最優秀作品として表彰された代表エンジニアの方々およびベストパフォーマー賞のアーティスト、ニュー・プロミネントマスター賞、アナログディスク特別賞の代表エンジニアに依頼し、受賞の感想、作品のコンセプトについてコメントをいただきましたので、41 頁以降に掲載させていただきます。

第 26 回日本プロ音楽録音賞 授賞式次第

1、主催者代表挨拶

第 26 回日本プロ音楽録音賞 運営委員長
一般社団法人日本音楽スタジオ協会

名誉会長 内沼 映二

2、ご来賓ご挨拶

経済産業省 商務情報政策局
コンテンツ産業課

課長補佐 中山 祥 様

3、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

C D 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

会長 高田 英男

C D 部門 ポップス、歌謡曲

一般社団法人日本レコード協会

理事 畑 陽一郎

特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会

副理事長 森元 浩二

ハイレゾリレーション部門 クラシック、ジャズ、フュージョン

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

名誉会長 内沼 映二

ハイレゾリレーション部門 ポップス、歌謡曲

特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会

副理事長 森元 浩二

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

会長 高田 英男

4、ベストパフォーマー賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN

副理事長 松武 秀樹

理事長 椎名 和夫

5、最優秀作品・優秀作品の発表及び表彰並びに審査員講評

放送部門 2ch ステレオ

日本放送協会 放送技術局制作技術センター

専任局長 大沼 雄次

放送部門 マルチ ch サラウンド

日本放送協会 放送技術局制作技術センター

専任局長 大沼 雄次

株式会社 dream window

代表 深田 晃

6、アナログディスク特別賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

名誉会長 内沼 映二

一般社団法人日本オーディオ協会

事務局長 照井 和彦

7、ニュー・プロミネントマスター賞の発表及び表彰並びに審査員講評

一般社団法人日本音楽スタジオ協会

名誉会長 内沼 映二

8、受賞者代表挨拶

C D 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン 最優秀賞

ミキシング・エンジニア

日本コロムビア株式会社

塩澤 利安

以上

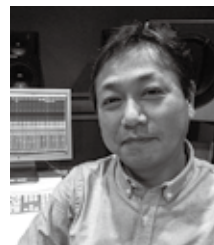
CD 部門 「クラシック、ジャズ、フュージョン」

(写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番／
ピアノ・ソナタ第2番」(COCQ-85458) より
「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番より
第3楽章」
反田恭平 (ピアノ)
アレクサンドル・スラドコフスキー (指揮)
ロシア・ナショナル管弦楽団 CD

発売元：日本コロムビア株式会社



☆ミキシング・エンジニア：塩澤 利安 (日本コロムビア株式会社)

<受賞のことば>

この度は名誉ある賞に選定して頂き大変光栄に思います。常に多くの目標を持って様々なレコーディングに臨んでいますが、「日本プロ音楽録音賞受賞」も私の目標の中の一つです。目標を一つ達成出来たことに心から喜びを感じております。

今回受賞した作品は、圧倒的な演奏を聴かせる注目のピアニスト・反田恭平と、ロシアで長年音楽界を牽引してきた指揮者・アレクサンドル・スラドコフスキー、ロシア屈指の名門オケ「ロシア・ナショナル管弦楽団」の共演による難曲中の超難曲「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番」です。

録音は2018年10月にモスクワの Philharmonia-2 ラフマニノフホールで行われました。ホールは1000席規模でしたので、コンチェルトの録音には若干狭い印象を受けましたが、落ち着いた残響の中で低域の充実したサウンドが特徴的でした。

ホールごと様々な特徴があるものの、基本的なマイキングアプローチを大きく変えることはありませんが、この作品に於いてどんな感動を引き出すことができるか、直感的な印象も大切にしながら最後の仕上げまで一貫させられるように現場で臨機応変にアレンジを加え、より良いサウンドを目指して努力をしました。

最後になりますが、素晴らしい演奏を創り上げた皆様、制作に携わった全ての方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

○マスタリング・エンジニア：佐藤 洋 (日本コロムビア株式会社)

[優秀賞]

●作品「Pioggia」(CHYR-001) より
「Pioggia」 Hitoshi Nakajima CD

発売元：株式会社ディスクユニオン



☆ミキシング&マスタリング・エンジニア：今関 邦裕
(株式会社サウンド・シティ)

○アシスタント・エンジニア：青木 礼門 (株式会社サウンド・シティ)

CD 部門 「ポップス、歌謡曲」

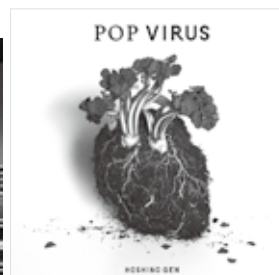
(写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品「POP VIRUS」(VICL-65085) より

「Pop Virus」 星野源 CD

発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント



☆ミキシング・エンジニア：渡辺 省二郎
(株式会社 レインボーエンタテインメント)

<受賞のことば>

「ありがとうございます」

○マスタリング・エンジニア：内田 孝弘
(株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント)

[優秀賞]

●作品「FUTURE」(RZCD-86904) より

「ZERO GRAVITY」 I DON'T LIKE MONDAYS. CD

発売元：エイベックス・エンタテインメント株式会社



☆ミキシング・エンジニア：安達 義規 (株式会社 ミキサーズラボ)

○マスタリング・エンジニア：酒井 秀和
(株式会社 ソニー・ミュージックソリューションズ)

○アシスタント・エンジニア：近藤 麻衣
(株式会社 スキップファクトリー Land Mark Studio)

○アシスタント・エンジニア：後藤 真太郎 (株式会社 ミキサーズラボ)

ハイレゾリレーション部門 「クラシック、ジャズ、フュージョン」
(写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品「ViVa The Four Seasons (A.Vivaldi Concerto NO-1_NO-04)」より
「Summer MOV-03」 UNAMAS Strings Sextet フォーマット：192kHz / 24bit 5.1ch

発売元：有限会社沢口音楽工房 UNAMAS レーベル

配信元：e-onkyo music、mora



☆ミキシング&マスタリング・エンジニア：沢口 真生（有限会社沢口音楽工房）

<受賞のことば>

本作は、2014 年からスタートした UNAMAS Label クラシックシリーズでの 11.1ch Immersive Audio 制作アルバムの集大成として制作しました。どのような音楽とマイキングがふさわしいのか？どのような配置が Immersive Audio にふさわしいのか？そして S/N を向上させるのはどのような方策があるのか？近年目に見えないが増加する EMC 電磁波ノイズにどう対応するのか？などなど制作を重ねるごとに毎回違った挑戦を積み重ねてきました。こうした結果が評価されましたことを、アーティストと制作チーム全員で喜びたいと思います。

音楽面から Immersive Audio に取り組むレーベルは、世界的にも数が少なく、こうした先進的な取り組みにアジアのブティックレーベルの一つとして関わりを継続してきたことに大変勇気を与えていただいた受賞だと思っています。

アメリカの友人が以下のようなコメントをしています。「100 ドル札を財布に入れても大きなボストンバッグに入れても中身は変わらない。真のハイレゾ音楽を制作するならボストンバッグに目一杯札束を入れて初めてハイレゾと言える」これからも愚直にハイレゾの器にふさわしいアルバム制作に精進していきたいと思っています。最後に今年度で通算 6 度目となる UNAMAS Label のアルバムを評価していただいた審査の方々に感謝申し上げます。

○システム・エンジニア：伊藤 仁（株式会社シンタックスジャパン）

○システム・エンジニア：宮下 清孝（株式会社 JION（慈音））

[優秀賞]

●作品「Orb」より「Lenna」 Miyu Hosoi

フォーマット：96kHz / 24bit 5.0ch (オリジナル 22.0ch)

発売元：Salvaged Tapes

配信元：OTOTOY



☆ミキシング・エンジニア：蓮尾 美沙希（株式会社 WOWOW）

○ミキシング・エンジニア：葛西 敏彦

(studio ATLIO / Oasis Sound Design Inc.)

○システム・エンジニア：久保 二郎（株式会社アコースティックフィールド）

ハイレゾリューション部門 「ポップス、歌謡曲」

(写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

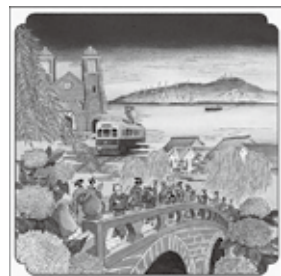
■作品「新自分風土記Ⅰ～望郷篇～」より

「長崎小夜曲」 さだまさし

フォーマット：96kHz / 24bit 2ch

発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

配信元：e-onkyo music、mora



☆ミキシング・エンジニア：三浦 克浩（有限会社ジェニュイン）

<受賞のことば>

この度、e-onkyo music 様の推薦を受けましてはからずも「さだまさし 新自分風土記Ⅰ～望郷篇～」 「長崎小夜曲」に対して、最優秀賞をいただきました。審査に関わってくださった皆様、制作に関わった皆様、そして何より佐田雅志様にお礼を述べさせていただきます。

受賞いたしましたこのセルフカバー 2 枚組は、シンプルなアコースティック楽器編成で原曲とは全く違うアレンジで構成され、「さだまさし」の人生に於いて最も大事な町である、奈良と長崎に帰郷するというコンセプトで制作されました。

録音は主に音響ハウスにての収録でしたが、小曽根真様、莊村清志様とのデュオは、AVACO スタジオでの同時収録です。

又、上記コンセプトのもとに現地での収録もあり、長崎では浦上天主堂にてコーラスや、パイプオルガンの収録も行いましたが、現地録音とスタジオ録音の空間的なギャップを埋める為にインパルスレスポンスを録り、コンボリレーションリバーブを活用しました。

「長崎小夜曲」は重量感のある二枚組アルバムの中で、サウンド的にも詩的にも、最もイージーに聞ける曲ですが、編曲者の倉田信雄様の要望でリズム楽器の定位を散りばめることになった為に、一考しなければいけない状況でした。なぜならば現在ではヘッドフォンを用いる聴者が多いからです。

そこでヘッドフォンで聞いても左右に張り付かないように、帯域分割した後にパンニングを変えてステレオフォニックでもバイノーラルでもない仕上がりを目指した作品です。

○マスタリング・エンジニア：吉良 武男（株式会社テイチクエンタテインメント）

○レコーディング・エンジニア：中内 茂治（株式会社音響ハウス）

[優秀賞]

●作品「camomile colors」より「Just When I Needed You Most」

藤田 恵美 フォーマット：192kHz / 24bit 2ch

発売元：HD Impression

配信元：e-onkyo music、mora



☆ミキシング&マスタリング・エンジニア：阿部 哲也（HD Impression）

○セカンド・エンジニア：内野 太亮（株式会社音響ハウス）

○サウンド クオリティ・エンジニア：金井 隆（かないまる）

放送部門 「2ch ステレオ」

(写真は☆印の代表エンジニア)

[優秀賞]

■作品「第 60 回輝く！日本レコード大賞」より

「アイノカタチ feat.HIDE (GReeeeN)」 MISIA

TBS HDTV stereo 2018 年 12 月 30 日放送

☆ミキシング・エンジニア：森 和哉 (株式会社 TBS テレビ)

○セカンド・エンジニア：相馬 敦 (株式会社 TBS テックス)

○セカンド・エンジニア：中村 全希 (株式会社 TBS テレビ)

○セカンド・エンジニア：田中 聖二 (株式会社毎日放送)



[優秀賞]

●作品「第 69 回 NHK 紅白歌合戦」より

「アイノカタチ feat.HIDE (GReeeeN) ～ つつみ込むように・・・」

MISIA

日本放送協会 HDTV stereo 2018 年 12 月 31 日放送

☆ミキシング・エンジニア：永田 隆信 (日本放送協会)

○セカンド・エンジニア：吉田 英人 (日本放送協会)

○セカンド・エンジニア：志村 宏 (日本放送協会)

○フロア・チーフ：山田 美慧 (日本放送協会)



[審査員特別賞]

●作品「オペラ・ファンタスティカ／宮崎国際音楽祭 歌劇「ボエーム」」より

「歌劇「ボエーム」第 2 幕」

指揮：広上淳一 宮崎国際音楽祭管弦楽団

日本放送協会 FM stereo 2019 年 8 月 30 日放送

☆ミキシング・エンジニア：篠 なほ子 (株式会社ネオテック)

○セカンド・エンジニア：山縣 淳一 (株式会社 NHK テクノロジーズ)



放送部門 「マルチ ch サラウンド」
(写真は☆印の代表エンジニア)

[最優秀賞]

■作品「SHIBUYA NOTE Presents
Nulbarich -A STORY-」より
「Super Sonic」 Nulbarich
日本放送協会 4K UHDTV 5.1ch
2019 年 9 月 23 日放送



☆ミキシング・エンジニア：
柳谷 智章 （日本放送協会）

<受賞のことば>

この度は最優秀賞へ選定していただき誠にありがとうございます。このバンドの曲を初めて聴いたとき、これをサラウンドで表現できたらとても面白いものができそうだと直感しました。しかしポップスにおけるサラウンド制作はハイビジョン黎明期こそ盛んでしたが、現在は少し停滞気味だと感じていました。ですが、BS4K コンテンツという新たなメディアとしての付加価値として、さらに昨今のイマーシブオーディオの潮流という意味においてもサラウンド制作を熱望し実現することができました。目指したサウンドは、5.1ch ならではの広がりとお行きがあり、時折派手なパンニングにより驚きを与えながらも、自然と楽曲に没入できる空間表現とミックスバランスです。そして、放送作品としてとても重要な、ダウンミックスステレオとの両立にとっても気を配りました。

今回の受賞を励みに今後もサラウンド制作、さらに 22.2ch という 3D 空間での音楽表現にも積極的に取り組んでいきます。

○フロアー・チーフ：桐原 麻美 （日本放送協会）

[優秀賞]

●作品「プレミアムシアター」より
「ラロ作曲「スペイン交響曲ニ短調作品 21 第 5 楽章」」
ヴァイオリン：クリスティアン・テツラフ
指揮：井上道義 NHK 交響楽団
日本放送協会 HDTV 5.0ch 2018 年 10 月 22 日放送



☆ミキシング・エンジニア：山縣 淳一
(株式会社 NHK テクノロジーズ)

- セカンド・エンジニア：矢嵩 諭 （株式会社ネオテック）
- セカンド・エンジニア：篠 なほ子 （株式会社ネオテック）
- セカンド・エンジニア：満尾 智子 （日本放送協会）

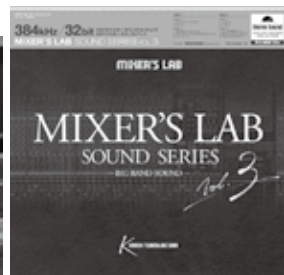
アナログディスク特別賞

■作品「MIXER'S LAB SOUND SERIES Vol.3」 (SSAR-036 ~ 037) より

「モーニン」 角田健一ビッグバンド

30cm 33回転

発売元：株式会社ミキサーズラボ



☆カッティング・エンジニア：北村 勝敏

(株式会社ミキサーズラボ

ワナーミュージック・マスタリング)

<受賞のことば>

この度のアナログディスク特別賞受賞にあたり、大変光栄に思っております。

今回、受賞の対象となったレコードは、演奏、レコーディング、ミックス、マスタリングと、僭越ながらカッティング、そしてメッキ、プレスに至る全てのプロセスが優れていた結果の賜物です。

私の仕事はひとことで言ってしまうと、音をラッカー盤に刻む事です。音を刻むだけなら、手順さえ覚えてしまえば誰でも出来る作業でしょう。しかし、アーティストさんの生み出した音楽を、思いを最終形態の形となる元のラッカー盤に記録するわけですから、プロのエンジニアとしては音楽も、その思いも余す事なく伝えられるようカッティングすることが使命であると考えております。

「モーニン」は同シリーズの他の楽曲と同様に 384kHz / 32bit というハイスpekでした。この上ない音源をどの様にカッティングすべきか、ともすればカッター・アンプのブレイカーは落ちまくりです。この音源の周波数特性、ダイナミクスを損なうことなく、カッティング・レベルも限界ギリギリまで突っ込む！そうしなければ魅力あるレコードなんて出来ないと自らを奮起させ、アナログ・ディスクの持つ可能性を模索した、ひとつの結果が出せたのではないかと考えております。

ベストパーformer賞

■作品「森羅十二象」(ONL-11) より「モンゴル草原」

岡林 信康 CD

発売元：株式会社ディスクユニオン

アーティスト：岡林 信康



<受賞のことば>

ノーベル賞すら受賞したことも無い私ごときに、こんな立派な賞を贈って下さった運営委員会の御見識に、心から敬意を表します。
ありがとうございました。

ニュー・プロミネントマスター賞

■作品「涙と祈り (Tears and Prayers)」より 「エレジー (Elegy for solo marimba)」

名倉誠人

フォーマット：96kHz / 24bit 5.0ch

(オリジナル 9.0ch)

発売元：株式会社オクタヴィア・レコード



☆ミキシング＆マスタリング・エンジニア：
入交 英雄 (株式会社 WOWOW)

<受賞のことば>

この度は本賞を拝受し、まことにありがとうございます。

本録音は、友人でもあるマリンビストの名倉誠人氏とタッグを組んで5作品目となるアルバムです。この活動は自費出版に近いもので、2人で孤軍奮闘し出版して頂けるレコード会社を探しながら録音を続けるというちょっと変わった形の録音制作で、最初の録音から形になるまでに3年近くも要してしまいました。しかし、だからこそ色々なことに挑戦しAuro3D (明記こそしませんでした…) というフォーマットでのリリースに漕ぎ着けられたと思います。

名倉氏のマリンバはその常識を越えた表現力を持ち、またそのデューナミクは録音題材としても特異なもので、マリンバの概念を根底から覆すものでした。そのインパルスに近いアタックは、録音場所の素性をとても良く伝えるため、3D オーディオの題材としても打って付けと思えました。これが本作品をステレオ CD だけではなく 3D オーディオでリリースしたかった最大の理由でもあります。そしてこのインパルス感を表現するのにノイマンデジタルマイクとの出会いが一役買ったことも申し添えたいと思います。

幸いにも世界的に 3D オーディオの潮流の勢いが増しており、本賞の受賞を契機に 3D オーディオの普及に向けてさらなる活動に精進していきたいと思います。

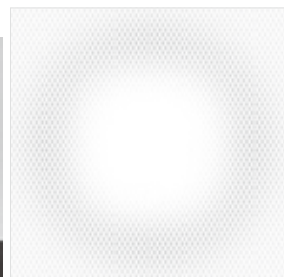
最後に、我々2人の活動にご協力 (巻き込んでしまった?) いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

■作品「Orb」より「Lenna」Miyu Hosoi

フォーマット：96kHz / 24bit 5.0ch

(オリジナル 22.0ch)

発売元：Salvaged Tapes



☆ミキシング・エンジニア：蓮尾 美沙希
(株式会社 WOWOW)

<受賞のことば>

優秀賞に重ねこのような賞を頂き、チーム一同本当に嬉しく思います。この賞は今後の音楽文化発展の担い手として期待されるエンジニア作品が選定されたとのことですが、確かに本作では多くの挑戦的な取組があったと思います。

まず、オリジナル版は音楽作品ではほとんど無い 22.0ch で制作しました。本作の立体

音響デザインおよびミキシング作業は、ほぼ全てヘッドフォン上のバーチャルスピーカ環境で行っており、スタジオ設備の無いエンジニアの自宅で大体の作業を進めました。特殊な 3D オーディオパンナーやプラグインは使用せずに、DAW のセンドバスや Aux を駆使してミキシングしています。

さらに本作は様々な再生フォーマットで展開しています。22.0ch の他、バイノーラル化した 2ch を CD 販売・配信しています。更に種々展示・イベントで、空間の音環境をいかすシステムを都度再構成しながら、22.2、9、5、2ch 再生を実現しました。

立体音響作品の制作・再生には、どうしてもハイエンドなスピーカーシステムが必要で、手が出し辛いイメージがあります。しかし専用のスタジオ環境が無くても、多数のスピーカーが無くても、工夫次第で立体音響制作・再生が可能である、という一例を提示したつもりです。本作をきっかけに、学生や若いエンジニア・アーティストがより気軽に立体音響に触れ、多様なコンテンツがたくさん生まれてほしいと切に願っています。

審査委員会

総合審査委員長 内沼 映二 副審査委員長 高田 英男、高橋 邦明

CD 部門およびハイレゾリューション部門（アナログディスク特別賞含む）

審査委員：内沼 映二、岡部 潔、川澄 伸一、椎名 和夫、
清水 三義、高田 英男、高橋 邦明、照井 和彦、
増田 晋、松武 秀樹、三浦 瑞生、森元 浩二、
山田 幹朗、脇田 貞二、渡辺 昭人

放送部門 審査委員：深田 晃、芝本 孝幸、鈴木孝十郎、高橋 正勝、
中島 博和、松永 英一

（以上 50 音順）

今回の顕彰内容については、各部門の最優秀作品と優秀作品の制作に携わったミキシング・エンジニア、マスタリング・エンジニア及びベストパフォーマー賞のアーティストに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈し、セカンド・エンジニア、アシスタントエンジニアには表彰状を贈呈。そしてアナログディスク特別賞のカッティング・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。また、審査員特別賞とニュー・プロミネントマスター賞についてはミキシング・エンジニアに表彰状とクリスタル製の表彰楯を贈呈。

なお、CD 部門、ハイレゾリューション部門の最優秀賞については、優秀なスタッフと良好な環境を提供されたメインのスタジオについても表彰状とクリスタル製の表彰楯が授与された。



受賞者集合写真

第 26 回日本プロ音楽録音賞 審査委員講評

< CD 部門 クラシック、ジャズ、フュージョン >

CD 部門「クラシック、ジャズ・フュージョン」について講評させていただきます。

今年度応募総数は 22 作品であり、昨年度とほぼ同数の応募でした。

では受賞されました作品について講評をさせていただきます。



(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長 高田 英男

●優秀賞

作品「Pioggia」(ピオッジャ：イタリア語で雨) より

楽曲「Pioggia」

アーティスト Hitoshi Nakajima

ミキシング&マスタリング・エンジニア：今関 邦裕 (株) サウンド・シティ

アシスタント・エンジニア：青木 礼門 (株) サウンド・シティ

発売元 (株) ディスクユニオン

録音：2018 年 7 月 サウンド・シティ世田谷

Focusrite アナログコンソールにて、DSD5.6MHz / 1bit マスター～CD 制作です。

録音マイク：C.Bass Sennheiser MKH800 (50kHz まで録音可能なハイエンドコンデンサーマイク、5つの指向性選択が可能で、空間表現に優れている。)

Apf DPA + Neumann + リボンマイク、

Drums O / H Sony 38B + リボンマイク

*マイク選択によりサウンドの色彩感表現し易い工夫をしていると感じます。

信州を中心に音楽活動をされている中島 仁さん、コントラバスをフィーチャーしたアルバムです。音楽性・サウンド創りなど自然豊かな環境で作品コンセプトが創られ、アコースティック楽器の魅力が自然で、素直なサウンドに表現されていると感じました。特に音の色彩感が豊かであり、音楽が心に届きます。

音の芯が明確で深く安定したコントラバス、クリアーで立上りの良いピアノ、美しく繊細なドラムなど、各楽器の音色の対比により、深い音楽空間が伝わってくる素晴らしい音創りと感じました。

●最優秀賞

作品「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番／ピアノ・ソナタ第2番」より
楽曲「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番ニ短調 作品30より第3楽章」
反田恭平（ピアノ）アレクサンドル・スラドコフスキー指揮
ロシア・ナショナル管弦楽団

ミキシング・エンジニア：塩澤 利安 日本コロムビア（株）
マスタリング・エンジニア：佐藤 洋 日本コロムビア（株）
発売元：日本コロムビア（株）

録音：2018年10月 モスクワ・ラフマニノフ・ホール録音
録音フォーマット：Pyramix 96kHz / 24bit マスター～CD制作。

塩澤さんの録音サウンドの特徴として、ホール録音においても大変クリアーで音の分離・解像力が素晴らしく、更にダイナミックレンジも広く、美しいピアノシモ～力強いフォルテシモまでダイナミックに音楽を表現されており、音創りと音楽感動が一体となっている作品創りと毎年感動しております。

特に今回、ピアノにオーケストラの音がかぶり、バランス創りが通常は大変だろうと思いますが、全く自然にバランスが創られ、まさに塩澤マジックです。今年度も塩澤さん担当作品が全て上位にランクされており、審査員一同凄いね・・・と感じておりました。

纏め

クラシック・ジャズ・フュージョン部門におきましては、アコースティック録音経験が長いベテランエンジニアの強さを感じます。

アコースティック録音の王道を進みながら、常にクリエイティブに録音技術を探究し、音創りにて音楽感動を高めている技術力・感性が素晴らしいと感じています。

クラシック・ジャズ・フュージョンのジャンルは、アコースティックの録音技術を学ぶ大切なジャンルです。

アコースティック録音技術の伝承は現状大きな課題であり、是非ともアコースティック録音の技術・感性（難しいかも？）を多くの次世代エンジニアに伝え、業界全体の活性化に繋がって頂ければと思います。

最後になりましたが、受賞されました皆様、本当におめでとうございます。

< CD 部門 ポップス、歌謡曲 >

CD 部門 ポップス、歌謡曲ですが、今年の応募総数は 47 作品と非常に多く、内訳は自薦 27、他薦 2、ミュージック・ソムリエさまからの推薦が 18 でした。作品数が多いので、審査は 3 時間ほど聞き続けるという、非常に集中力の必要な作業でした。今年の印象ですが、全体のレベルが非常に高く、点数を付けるのに非常に悩みました。

その中で優秀賞に選ばれたのは、I DON' T LIKE MONDAYS. さんのアルバム、「FUTURE」より「ZERO GRAVITY」。ローズ・ピアノとミュートギターで始まり、デッドなドラムサウンドとシルキーな歌が加わるという、軽快なサウンドの楽曲です。エンジニアリング的には各パートの空間系の処理が素晴らしく、特に楽器の配置が絶妙で、音の数は少ないのですが、隙間が空きすぎる事なく、詰まりすぎる事なく、絶妙のミックスでした。アーティストとアレンジ、そしてエンジニアリングが高次元で組み合わせあった素晴らしい作品です。



特定非営利活動法人
日本レコーディングエンジニア協会
副理事長 森元 浩二

最優秀賞は、こちらにもミュージックソムリエさん推薦の、星野 源さんのアルバム、「POP VIRUS」より「Pop Virus」です。歌とギターで静かに始まり、コーラス、ドラムが重なってきます。そしてこの曲の特徴である、2小節目の4拍目にすべての楽器が1拍、オーケストラヒットの様に出て来ます。歌は艶を与える程度にルームサウンドが付けられていますが、その他の楽器はドライな音作りで、ドライなのに詰まった音になることなく、艶やかなサウンドに仕上げているのは、素晴らしいと思いました。

どちらの曲もドライなサウンドですが、エンジニアリング的には非常にむづかしいのです。ドライなんだからバランス取るだけでいいだろ？と思われがちなのですが、それでは各楽器がバラバラで、1つのサウンドとして成り立ちません。マイクで録音するときの周りの空気感の録り込み方。そしてミックスの際には、微量のリバース、ディレイを付けて、艶を与えて、各楽器のつながりを良くする事が必要です。また各楽器の、もとの音も非常に重要で、チーム全体が明確なサウンドの目的を持って、録音当初から、きめ細かい音作りをして、作業をすすめる必要があります。その労力は大変なものだったと思います。

そしてマスタリングもミックスで組み上げられた世界観を崩すことなく、素晴らしい仕事をしています。このようなサウンドは音を大きくするためにリミッティングをすれば、隠れていた空間が持ち上がることになってしまいますが、2曲とも絶妙な空気感を保ちつつ、大きなサウンドになっているのは素晴らしいと思いました。

本当にどちらの曲も素晴らしいサウンドでした。そして他の 45 曲もこの 2 曲に劣ることなく、素晴らしい作品ばかりだったことを伝えて総評としたいと思います。

今回はおめでとうございます。

<ハイレゾリレーション部門 クラシック、ジャズ、フュージョン>

ハイレゾリレーション部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」講評をさせていただきます。今年度も昨年同様、2ch ステレオとマルチサラウンド作品を区分せずに審査・顕彰と致しました。今年度「クラシック、ジャズ、フュージョン」の応募作品数ですが、e-onkyo music 様、mora 様、OTOTOY 様の推薦及び、自薦を併せて 32 作品の応募がありました。（ノンパッケージ 29、パッケージ 3）ノンパッケージのデジタルフォーマット／スペックですが PCM-48kHz / 24bit（1 作品）、PCM-96kHz / 24bit（10 作品）、192kHz / 24bit（6 作品）、384kHz / 24bit（2 作品）* PCM フォーマット 19 作品。DSD2.8MHz / 1bit（4 作品）、DSD11.2MHz / 1bit（6 作品）* DSD フォーマット 10 作品です。

又、マルチサラウンドは（4 作品）でした。

昨年同様マルチサラウンド作品の応募が少ない傾向が続いています。



（一社）日本音楽スタジオ協会
会長 高田 英男

受賞されました作品の講評

●優秀賞

作品「Orb」より

楽曲「Lenna」

Lenna コンセプトボイス：Miyu Hosoi 96kHz / 24bit 5.0ch

ミキシングエンジニア：蓮尾 美沙希 （株）WOWOW

ミキシングエンジニア：葛西 敏彦 Studio ATLIO / Oasis Sound Design Inc

システムエンジニア：久保 二郎 （株）アコースティックフィールド

発売元：Salvaged Tapes

配信元：OTOTOY

オリジナル音源は 22.0ch であり 5.0ch にダウンミックスした作品です。

作品コンセプト：Lenna コンセプトボイス細井美裕さんの声のみで制作、アーティスト・作曲家・サウンドエンジニアが制作当初から打合せを重ね、音場空間を新たに表現する「音場創成」を目指す。

ミックス作業：バイノーラル技術を用いヘッドホンにてミキシングを行う。又、パンニング・音像調整は Pro tools のセンドバス、Aux を使って行っており、3D オーディオパanner・リバーブプラグインを使用していないとの事。

試聴感想

従来の録音技術を駆使しての音創りでは無く、アーティスト・作曲家・エンジニア・音響システムエンジニアによる、新たな音楽芸術作品への創作と感じました。サラウンド音響空間をデザインし、新たなクリエイティブ空間表現で作られた作品は、音楽表現の新たな可能性を提案しております。

我々レコーディングエンジニアにおける音楽表現の可能性を広げた作品であり、音楽制作におけるエンジニアのクリエイティブ力の重要性を痛感させられた作品です。

●最優秀賞

作品「Viva The Four Seasons (A.vivaldi Concerto NO-1_NO-04)」より

楽曲「Summer MOV-03」

UNAMAS Strings Sextet 192kHz / 24bit 5.1ch

ミキシング&マスタリングエンジニア：沢口 真生 (有) 沢口音楽工房

システムエンジニア：伊藤 仁 (株) シンタックスジャパン

システムエンジニア：宮下 清孝 (株) JION (慈音)

発売元：(有) 沢口音楽工房

配信元：e-onkyo music、mora

録音：2019年1月 軽井沢大賀ホールにて録音

録音機材：イマーシブオーディオ用に開発されたメインマイクツリーを使用

NEUMANN KM133D デジタルマイク&イギリス The Chord 社、デジタル

ケーブル、ハイトチャンネルマイク SONY C-100 ハイレゾマイク × 4

POWER YIIE3 (パワーイレ・スリー)、室内用可搬型蓄電、仮想アースボックス

2014年にスタートした大賀ホールでのクラシック録音の集大成作品。

試聴感想

UNAMAS サウンドの特徴である大変クリアーで徹底的にS / Nに拘り、ピアノシモの心地良い緊張感が音に伝わります。更に自然なホール音場空間の中でダイナミックな演奏が展開され、今の時代を象徴したサラウンドサウンドの魅力を堪能できる作品と感じました。

まさに大賀ホールにおける UNAMAS サウンドの集大成と感じました。

尚、沢口さんはサラウンド作品では第22回～今年度第26回まで5年連続受賞の快挙となりました。

纏め

今年度ハイレゾ部門「クラシック・ジャズ・フュージョン」の受賞作品は、昨年同様、2作品共にサラウンド作品が受賞されました。

受賞されましたそれぞれの作品は、音楽制作へのアプローチは大きく異なりますが、音楽制作におけるエンジニアとしてのクリエイティブ力の重要性を体感させられた作品です。レコーディングエンジニアが今後目指す大切な指針を感じさせる作品と思いました。

最後になりましたが、受賞されました皆様、本当におめでとう御座いました。

<ハイレゾリレーション部門 ポップス、歌謡曲>

(一社) 日本音楽スタジオ協会
会長 高田英男

今年度、「ポップス、歌謡曲」の応募作品数ですが、e-onkyo music 様、mora 様、OTOTOY 様の推薦及び、自薦を併せて12作品の応募となりました。

デジタルフォーマット／スペックでは48kHz／24bit（2作品）、96kHz／24bit（8作品）、192kHz／24bit（2作品）の内訳です。

受賞されました作品の講評

●優秀賞

作品：「camomile colors」（カモミール・カラーズ）より

楽曲：「Just When I Needed You Most」

アーティスト：藤田 恵美 192kHz／24bit 2ch

発売元：HD Impression

配信元：e-onkyo music、mora

ミキシング&マスタリング・エンジニア：阿部 哲也 HD Impression

セカンドエンジニア：内野 太亮 （株）音響ハウス

サウンドクォリティ・エンジニア：金井 隆 かないまる

録音スタジオ音響ハウスにおいて、アナログテープでの一発録音の音源をプロツールズ192kHz／24bit に取込み、DAW にてミックス。

6 リズムの一発録音をアンビエントマイク含めアナログテープレコーダー 24ch にて録音、ハーモニーのダビングでは、アナログテープとプロツールズに録音し、プロツールズに取込んだハーモニーの時間軸を基準に、アナログテープ音源の時間軸を調整し使用するなど、究極のアナログテープ録音に拘った作品創りです。

サウンド創りも、空間表現を大切にされた自然なアコースティックサウンドであり音色感も深く、藤田恵美さんの優しい歌声が心に響きます。

エンジニアプロデューサー阿部さんの音創りへの拘り・ポリシーが、藤田恵美さんの音楽の世界を音創りで広げている素晴らしい作品と感じました。

●最優秀賞

作品：「新自分風土記 I ～望郷編～」より

楽曲：「長崎小夜曲」

アーティスト：さだまさし 96kHz／24bit 2ch

発売元：(株) JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

配信元：e-onkyo music、mora

ミキシング・エンジニア：三浦 克浩 (有) ジェニユイン

マスタリング・エンジニア：吉良 武男 (株) テイチクエンタテインメント

レコーディング・エンジニア：中内 茂治 (株) 音響ハウス

録音スタジオ：音響ハウス

このアルバムは楽曲によってオルガン・コーラスは長崎浦上天主堂にて録音。

ヴォーカル録音機材：Neumann M-49, Amek-9098, Neve33609

ミキシングポイント

①編曲者の要望にて楽器の定位感をちりばめる定位設定。

編成はシンプルなピアノトリオ＋唄であり、各楽器及び唄の定位として、L側にピアノ、センターに唄、コンバス、R側にドラム配置で、各楽器定位も現状ではあまりしていない定位であり、ヘッドホン再生でも左右に音が張り付かない工夫（ステレオフォニックでもバイノーラルでもない工夫）

②唄ものですので、さだまさしさん言葉のメッセージが伝わる音創りであり、ライブ感のあるサウンドに仕上がっていると感じました。

纏め

エンジニアとして録音に臨む前に、録音するアーティスト・楽曲について、事前のサウンドイメージを具現化する為に、録音機材の選定などを進め、頭の中で数回ミキシングをしてサウンドイメージを作り上げる事が大切であると感じております。受賞されました作品は、楽曲の背景まで考え、サウンドを創り込んでいる作品と感じました。

ハイレゾリレーション部門も音楽ジャンルに区分し、審査・顕彰を行っていますが、応募される作品はクラシック・ジャズ・フュージョンの作品が多く、残念ながらポップス部門は少ないのが現状で御座います。

来年度は是非とも多くのポップス・歌謡曲の作品を応募して頂けます様にお願い申し上げます、講評とさせていただきます。

最後になりましたが、受賞されました皆様、本当におめでとう御座いました。

<ベストパフォーマー賞>

岡林信康さん、ベストパフォーマー賞おめでとうございます。岡林さんにこの賞をお送りすることができることを、本当にうれしく思っています。

僕のようなものが審査講評などとはおこがましくてとても申し上げられないんですが、僕の知っている岡林さんのアナザーストーリーということで、少しお話ししたいと思います。

岡林さんは今を去ること51年前の1968年、山谷ブルースで衝撃的にデビューされました。時は70年安保の2年前ですね。

世の中がとてもざわざわしていて、フランスでも五月革命だとかカルチェラタンだとか、世界中で学生たちが中心となって世直しを試みるというような、いうなれば極めて政治的な季節でもありました。ほくらもちょうど高校から大学に差し掛かるあたりで、新宿西口地下広場の反戦フォーク集会とか、そういう雰囲気の中でフォークミュージックがそういうムーブメントの象徴となった時代です。「友よ」とか「チューリップのアップリケ」とかの岡林さんの曲が、「インターナショナル」と一緒に歌われるような中で、岡林さんは「フォークの神様」というように呼ばれるようになりました。

その後、学生運動も大きな挫折を迎えるわけですが、そうした中から、今度はメッセージ性が全くない、抒情派フォークみたいなものが生まれてきます。これはこれで大きな流れになっていくんですが、岡林さんは、そうした流れとは一線を画して、はっぴいえんど



(一社)演奏家権利処理合同機構 MPN
理事長 椎名 和夫

を従えてロックへと転じられます。忘れもしない、1970 年に出た「見る前に飛べ」というアルバムですが、これにいたく揺さぶられたことを今でも鮮明に覚えています。

そんなこんなをきっかけに、僕自身も音楽を始めることになります。大学を辞めてしまって、ムーンライダーズというバンドでギターを弾き始めるんですが、なんと思いがけず、そのバンドで岡林さんのレコーディングをすることになります。ちょうど「見る前に飛べ」の中ジャケットに、コロムビアスタジオのはっぴいえんどとの録音風景の写真があったんですが、それと同じスタジオで岡林さんのバックで演奏することになるなどとは夢にも思わず、とても緊張して、また興奮したことをよく覚えています。

僕らからすれば、岡林さんといえば、やはりメッセージ性の方の印象が強かったんですが、そんなことは全くなくて、とても繊細に音楽を作る方だということがわかり、またその姿勢から、たくさんのことを教えていただきました。

そんなご縁で、労音のコンサートツアーのお仕事もいただきまして、全国津々浦々を回るホールツアーにご一緒することになります。当時まだ左側通行だった沖縄にも行ったんですが、予算がないからメンバーは3人だけにしてくれと言われてまして、たしか、鈴木慶一君とバイオリンの武川君と3人で行きました。慶一君がドラムで、僕がベースを弾いたなんてこともあったと記憶しています。

また当時岡林さんが、物置でカビさせちゃったというギルドのギターをお持ちで、ちょうど僕が使っていたヤマハのギターを気に入られて、交換しようや、なんてことになりました。そのギルドのギターは、すぐに御茶ノ水のカワセ楽器に持ち込んでオーバーホールしたら減茶苦茶いい音になって、今思えばとてもナイスな物々交換をしたと思っています。ちなみにそのギターは、紆余曲折を経て今では山下達郎君が使っています。

こういう話はきりがないので、この辺にしますが、メッセージソングというスタイルから始まって、そのパブリックイメージでご苦労もあったとは思いますが、一貫して、どん欲にご自身の音楽を追及される姿勢は50年を経た今も全く変わっていません。とても大きな影響を与えてくださった大先輩です。

そんな岡林さんにこの賞をお送りできるのはとても光栄なことです。今日は残念ながらコンサートとぶつかっていてお越しいただけなかったんですが、これからもみんなの先頭に立って歌い続けていただけますよう、心から願っております。

岡林さん、ベストパフォーマー賞受賞、おめでとうございます。

<放送部門 2ch ステレオ／マルチ ch サラウンド>

放送部部門の講評を行います。

放送部門は2ch ステレオの応募総数が23作品、そのうちラジオが6作品、マルチチャンネルサラウンドの応募総数が10作品、合計33作品の応募がありました。

審査にあたりましてはPro Tools等のマルチトラックで収録し、ミックスダウンを行った作品、生放送等でのダイレクトミックスの作品を区別せず、最終的な作品の良し悪しを厳密に視聴し判断を行いました。

応募作品の全体の印象としましては、平均的には作品制作のレベルが上がってきていると感じました。ただ少しですが、もう少



(株) dream window
代表 深田 晃

しの努力が必要な作品も見られました。

特にテレビ放送での音楽制作に関しましては、他部門と異なりある程度のグループで制作が必要となります。録音（放送）担当はPAの音や音量にも配慮しながら録音を行っています。そういう意味ではエンジニア1人だけで録音が成り立つ訳ではなくベテランエンジニアが若手をサポートしながら制作を行なう環境があると言えます。もちろんエンジニアの力量が作品のレベルを決定する事に変わりはありません。

ただ、そう言った環境であるがゆえに、放送部門では若手の応募が多くあります。

それでは受賞作品の講評を行います。

まず、2ch ステレオですが、『審査員特別賞』として選ばれたのが、作品「オペラ・ファンタスティカ／宮崎国際音楽祭 歌劇「ボエーム」より第2幕、指揮：広上淳一 宮崎国際音楽祭管弦楽団」が選ばれました。これはFM放送です。

演奏会形式のため歌手の動きをステージマイクでフォローするのは大変だったと思いますが、オーケストラ全体を3点吊りで捉えることができたので通常のオペラの収録に比べて自然な仕上がりとなっています。合唱の臨場感もよく表現されており、ダイレクトミックスの技術の高さが評価できます。素晴らしい仕上がりになっていると思います。

次の賞ですが、1位と2位の差がほとんどなく優秀賞を2作品といたしました。

これは最優秀に当たらないという訳ではなく2作品ともそのレベルにあると判断いたしました。

まず最初に「第60回輝く！日本レコード大賞」「アイノカタチ」MISIA TBS

これは新国立劇場の生放送、2chダイレクトミキシング作品です。

オーケストラ＋バンドという大編成、MISIAさんの歌唱をダイナミックに捉えています。

バランスや広がり感もよく受賞にふさわしいサウンドに仕上がっています。

そして次は「第69回紅白歌合戦」より

「アイノカタチ～つつみ込むように・・・」MISIA NHK

回線は44回線、4時間30分の生放送の中のメドレーでなんとTBSの作品と同じMISIAさんの楽曲、しかも生放送で2chダイレクトミックスという1日違いで場所が違うだけという応募作品でした。音のバランスは聴きやすく、サウンドバランスも良く安心して楽曲を楽しめるサウンドでした。生放送の中のステージングの複雑な中、繊細でダイナミックレンジのある優れたミックスを聞かせてくれました。

そしてマルチチャンネルサラウンド部門の作品ですが、優秀賞「プレミアムシアターN響ベトナム公演」より「スペイン交響曲ニ短調作品21／ラロ作曲」指揮：井上道義 演奏：クリスティアン・テツラフ（VI）、N響 NHKが選ばれました。

機材的にも厳しいホーチミンでの収録で、映像を見ると古いが雰囲気のあるホーチミン市民劇場の感じがよくわかる、明るく明瞭度の高い表現と無理のない自然なサラウンド感の優れた作品でした。

最優秀賞は「SHIBUYA NOTE Presents Nulbarich -A STORY-」より「Super Sonic」Nulbarich

Nulbarich（ナルバリッチ）のリズムに重点をおいたバンドのスタジオ録音。

ライブ収録ではない点を利用した創造的サラウンド。サラウンドが自然に広がり、時折

GTR や CHO が効果的にリアヘ音をパンニングしており、それが不自然さを感じさせないような巧みにコントロールされている。自然に楽曲の没入できる巧みなミクシングだと感じ、最優秀賞にふさわしい作品であると感じました。

放送部門ですが、今回は特にサラウンド作品の完成度の高さが印象的でした。

今後もベテランは若手に、若手は新しいことに積極的にチャレンジし放送の音楽作品のレベルを高めてもらえればと思います。

改めまして受賞された皆様、おめでとうございます！

<アナログディスク特別賞>

この音楽録音賞が始まった 1994 年にはアナログディスクの製造が終了しているレーベルがほとんどで、パッケージの主力は完全に CD-DA コンパクトディスクに移っていました。従いまして、アナログディスクは応募作品分類の対象ではありませんでした。

しかしながらここ数年のアナログ回帰の風が吹く中、日本プロ音楽録音賞の運営委員会では 1 年以上前からこのアナログディスクへの取り組みについて検討して参りました。そして今年、ディスクカッティングエンジニアを特別賞として顕彰することと致しました。

今回はカッティングマシンを稼働させている 7 つのスタジオ、およびオーディオ専門誌からの推薦で、集まった審査対象となった作品は 14W で、7 インチ盤もありました。



(一社) 日本オーディオ協会
事務局長 照井 和彦

作品内容は、旧譜作品のリミックスやリテイクを含めましても 2018 年の新譜が半数を占めており、残りはこれまでの人気作品からの新たなカッティング作品でした。これからは話題の新作がアナログでリリースされていくことを願いたいと思います。

さて、受賞されました北村勝敏さん。

「角田健一ビッグバンドの演奏・モーニン」でめでたく受賞されました北村さんが作業所属しているミキサーズラボでは、2017 年 7 月からカッティングを始めたということですが、北村さんは過去のアナログ全盛時代にカッティングエンジニアとして活躍しておりましたが、しばらくはブランクがあった中での、めでたく今回受賞となりました。

先ほどお聴き頂きましたとおり、2 ミックスマスターの生なましが忠実にレコードに刻まれている、といった強い印象のサウンドで、審査結果の得点もダントツの 1 位でした。

アナログレコードはわたしたちオーディオ愛好家の再生ソフトとして、これから再び不動の地位を築いていってくれる可能性を秘めております。オーディオマニアの 1 人としても期待していることをお伝え致しまして、わたくしの講評とさせていただきます。

北村さま、受賞まことにおめでとうございます。

<ニュー・プロミネントマスター賞>

3年前から新設しましたこのニュー・プロミネントマスター賞は、独自の感性と、今後の音楽録音文化発展を示唆したエンジニアを顕彰する賞です。今年はこの賞にふさわしい2作品が受賞しました。

まず1作品目ですが、WOWOWの入交さんの作品、マリンバ独奏「涙と祈り」です。

入交さんと最初にお会いしたのは、2006年 AES サラウンド・サウンド・リファレンス・ディスクの録音の時、毎日放送のホール。その時代からサラウンドの研究を深くなされていた思い出があります。



(一社)日本音楽スタジオ協会
名誉会長 内沼 映二

この作品のオリジナルは、7.0.4chの3Dオーディオですが、現在のプロ録では、5.1chが基本になっていますので、入交さんには7.0.4chから5.0chにダウンミックスをして頂きました。

お恥ずかしい話ですが、我々のスタジオでは、3Dオーディオを聴く環境を持ち合わせていませんので、時代遅れとあちこちから言われていますが、来年にはせめて7.0もしくは7.1chの試聴環境を整えたいと思います。

さて、作品内容ですが、録音は神戸にある松陰女学院大学の教会での収録です。

入交さんのコメントにもありましたが、臨場感にはオブジェクト臨場感とフィールド臨場感の2種類があり、この二者は、相いれない相克（そうこく）の関係があり、7.0.4chによりこれを両立させる試みを行ったとの事です。

教会の残響時間5.5秒の豊かな響きを、無指向のアンビエンス・マイクを中心に構成し、メインは、ノイマンのデジタル・マイクによるデッカ・ツリー方式により、パルシブなアタックとダイナミックレンジを確保している事で、楽器の明瞭度を維持しつつ豊かな残響を表現するのは大変難しいのですが、明瞭度と豊かな残響を得ているのではないかと思います。

この様に、7.0.4chの効果で、左右、前後、上下の広がりを得る事で、見事な3Dサラウンド・サウンドを創造しています。

ダウンミックスされた5.0chでも、十分に7mの高さのハイトチャンネルを感じられます。目をつぶって聴くとスピーカの存在感がない、見事なサウンド・フィールドでした。是非オリジナルの7.0.4chを聴きたいと思います。

次の作品ですが、先程のハイレゾ部門で優秀賞を受賞した「Orb」より「Lenna」ミキシングをされたWOWOW 蓮尾 美沙希さんの作品です。

ハイレゾ作品でも受賞されていまして、先程 高田さんの講評で全てを語って頂きましたので、重複しないでお話をします。

この楽曲のオリジナルは22.2chですが、蓮尾さんが22.2chにトライした事は大変なことで、システム構成やモニター環境を創るのも大変ですし、蓮尾さんがどこで22.2chを

勉強したのか、出身校を調べたら東京芸大。もしや、亀川教授の教え子ではと高田さんに聞いたら、その通りということで、点が全て繋がった思いです。

亀川教授はNHK時代から22.2chを研究されて、芸大に移ってからの研究でも22.2chの全てを知り尽くしているのではないかと思います。

3年前に、ニュー・プロミnentマスター賞を受賞した、ビクタースタジオの高須さんの作品で、アーティストの悠木 碧（ゆうき あおい）さん1人コーラスの多重録音による「トコワカノクニ」という、DVD-VIDEOの5.1chでしたが、平面のサラウンドを最大限に生かした、高須さんの感性による音場空間には感動しましたが、蓮尾さんの作品は、先程 高田さんの講評でもありましたが、アーティストと、3人のサウンドエンジニアが綿密なディスカッションを重ねたサウンドデザインの結果がこの作品と思います。

まず、平面の左右、前後の広がりに加え、ハイトチャンネルの上下の3Dサウンドは圧倒的な音響空間を創っています。蓮尾さんのコメントではホール録音のような「音場再現」に対し「音場創成」とコメントしていますが、正にその通りと思います。

入交さんの作品も蓮尾さんの作品にしても、まったく違う音楽ジャンルですが、新たな音楽表現の可能性を見出した気がします。この先、3D オーディオから新たな音楽が誕生するかも知れません。

「音の日のつどいパーティー」レポート

令和元年12月6日（金）「音の日」記念イベントとして、18：45より半蔵門FM TOKYO ホールに於いて、当協会および一般社団法人日本オーディオ協会、特定非営利活動法人日本レコーディングエンジニア協会、一般社団法人日本レコード協会、一般社団法人演奏家権利処理合同機構 MPN の共催により、第26回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者と当日併行して開催された一般社団法人日本オーディオ協会主催の「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」および音の日特別講演「オーディオの未来を語る」の関係者が参加した「音の日のつどいパーティー」が開催された。

当日の様様を以下にレポートさせていただきます。

日本プロ音楽録音賞授賞式の司会に続き、進行役は増田 みのり氏が務め、最初に一般社団法人日本レコード協会・理事 畑 陽一郎氏より来場者に対して開会の辞が述べられた。

続いて、音の日実行委員長の一般社団法人日本オーディオ協会 林 和喜氏より「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」の受賞者が紹介された後、第26回日本プロ音楽録音賞に於いて表彰された各部門の受賞者を代表して、最優秀賞に選定された代表エンジニア7名、アナログディスク特別賞1名、ベストパフォーマー賞1名およびニュー・プロミネントマスター賞2名が紹介された後、エンジニアを代表して、日本コロムビア（株）塩澤 利安氏が挨拶を述べられた。



（一社）日本レコード協会
理事・畑 陽一郎氏

CD部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」

塩澤 利安氏 日本コロムビア（株）

CD部門「ポップス、歌謡曲」

渡辺 省二郎氏 （株）レインボーエンタテインメント

ハイレゾリレーション部門「クラシック、ジャズ、フュージョン」

沢口 真生氏 （有）沢口音楽工房

ハイレゾリレーション部門「ポップス、歌謡曲」

三浦 克浩氏 （有）ジェニュイン

放送部門「2ch ステレオ」

該当者なし

放送部門「マルチ ch サラウンド」

柳谷 智章氏 日本放送協会

ベストパフォーマー賞

岡林 信康氏

アナログディスク特別賞

北村 勝敏氏 （株）ミキサーズラボ ワーナーミュージック・マスタリング

ニュー・プロミネントマスター賞

入交 英雄氏 （株）WOWOW

蓮尾 美沙希氏 （株）WOWOW



音の日実行委員長
（一社）日本オーディオ協会
林 和喜氏



「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」受賞者



第26回日本プロ音楽録音賞受賞者



内沼名誉会長



(一社)日本オーディオ協会
会長・小川理子氏

塩澤 利安氏挨拶の後、一般社団法人日本音楽スタジオ協会 名誉会長 内沼 映二氏による乾杯の発声が行われ、歓談タイムとなる。会場内では受賞者を取り囲んでの写真撮影や談笑する場面が見受けられ、今年も様々な音のプロフェッショナルな方々が一同に会する場となりました。最後に中締めの日となり、一般社団法人日本オーディオ協会 会長 小川 理子氏より、参加者に対して御礼の挨拶が述べられた。

今回もプロ音楽録音賞の運営委員会および審査委員の皆様をはじめ、多くの関係者のご協力により、第26回目を無事に終了することが出来ました。有難うございました。



会 員 動 向

1. 会員数（令和元年 10 月 1 日現在）

正会員（法人）	22 法人	準会員	3 法人
正会員（個人）	13 人		
賛助会員Ⅰ	47 法人	賛助会員Ⅱ	2 法人

2. 入会

①賛助会員Ⅰ

シュア・ジャパン株式会社 9月1日付

3. 退会

①個人正会員

山田 正弘 9月30日付

②賛助会員Ⅰ

スチューダー・ジャパン－ブロードキャスト株式会社 9月30日付

4. 法人・会員代表者および住所変更、その他

①法人正会員

○役職変更

株式会社 音響ハウス 広岡 淳利
(旧) 代表取締役会長
(新) 取締役相談役

②賛助会員Ⅰ

○法人名変更

(旧) 日本板硝子環境アメニティ株式会社
(新) 日本環境アメニティ株式会社

○法人代表者、会員代表者変更

ヒビノインターサウンド株式会社
(旧) 榎本 隆二
(新) 生出 修（代表取締役社長）

5. その他

○担当者変更

経済産業省 商務情報政策局 コンテンツ産業課

(旧) 渡邊 佳苗

(新) 渡辺 結衣 (係長)

○代表者変更

株式会社エス・シー・アライアンス

(旧) 山中 洋一

(新) 山本 浩一 (代表取締役社長)

○社名変更

(旧) 株式会社 NHK メディアテクノロジー

(新) 株式会社 NHK テクノロジーズ

○代表者変更

株式会社東宝スタジオサービス

(旧) 今井田 能壽

(新) 島田 充 (代表取締役社長)

○理事長変更

一般社団法人日本音楽制作者連盟

(旧) 門池 三則

(新) 野村 達矢

○理事長変更

日本コンパクトディスク・ビデオレンタル商業組合

(旧) 世良 與志雄

(新) 加藤 和裕

○理事長変更

特定非営利活動法人 Recording Musicians Association of Japan

(旧) 篠崎 正嗣 (会長就任)

(新) 那須野 直裕

♪ 編 集 後 記 ♪

オリンピックチケットの当選を祈る！ この頃です…

Smith

いつの間にやら2020年オリンピックイヤー。海外から多くの方がやって来て、思いもよらぬことが起きるかも……。備えあれば憂いなし、いろんなことを想定して動かないと。

pesonai

頭部に発症した疱疹のお陰で、1年10ヶ月も薬を飲みましたが、医者にならなくて飲酒の度を増す毎に、痛みを感じなくなり、薬より酒が効くと勝手に決めた昨年でした。新年は東京オリンピックの年、皆様元気に前進しましょう。

hair ken short

明けましておめでとうございます。新たな挑戦の年となりそうな予感にワクワクしています。本年も宜しく願い申し上げます。

mm

*****総 務 委 員 会*****

委 員 長 清水 三義（青葉台スタジオ）

委 員 内藤 重利（事務局）

” 佐藤 賢一（ ” ）

” 伊東 真奈美（ ” ）

【発行人】 会 長 高 田 英 男 【発 行】 2020年（令和2年）1月

【発行所】 一般社団法人 日本音楽スタジオ協会

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目1番11号 モナーク大久保3F

TEL. 03-3200-3650 FAX. 03-3200-3660

<https://www.japrs.or.jp> E-mail:japrs@japrs.or.jp

【編 集】 総 務 委 員 会 【印刷所】 株式会社研恒社



JAPRS

Japan Association of Professional Recording Studios

<http://www.japrs.or.jp> E-mail: japrs@japrs.or.jp